
晩年のルイズとその家族

frey

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

晩年のルイズとその家族

【Nコード】

N4649U

【作者名】

フレイ

【あらすじ】

ハルケギニアから魔法が突然、消滅し、60年間、貴族だった事を隠し通したルイズの生涯と召喚された謎の青年の物語である。

この作品は筆者が、突発的に書きたくなって作りました。

とある筆者様から使用許可を頂いて一部を引用しています。

こちらにも連載中の作品との繋がりはありません。

物語は今年中に完結予定です。

利用規約改訂により、原作の部分を引用しています。

プロローグ（前書き）

何故か書きたくなりまして書きました（笑）

プロローグ

「それでね、お祖父様は……」

色褪せたピンクブロンドの70過ぎの祖母が孫娘らしき少女に楽しそうに、その少女の祖父であり、自分の夫との思い出を話していた。孫娘は15歳位で、祖母と同じピンクブロンドで可愛く、笑顔で話を聞いている。

少女時代の祖母に似ているかもしれない。

祖母は普段、歩く時に使っている一本の長い杖を持ち、イスに座った状態で部屋の天井に掲げた。

「私が学生だった頃に学院で使い魔を召喚する儀式があつてね……」

「お婆ちゃんはそこでお爺ちゃんを召喚しちゃったんだよね」

「そうよ……こんな風に……」

祖母が杖を掲げてブツブツと何かを唱え始めた。

すると、杖を向けた方向である天井から突然、人が落ちてきた。

「「!!」」

二人はいきなり天井から人が落ちてきた事に驚いた。

「此処は何処だ？」

現れたのは青白い髪と目の美青年であり、辺りを見回している。

「……………」

「……………貴方は誰？」

祖母は無言、孫娘が青年に何者が尋ねた。

「アルシオンだけど此処は？」

何事もなかったように普通にアルシオンと名乗った。

「……………ビックリしたわ。」

もう魔法は消滅した筈なのに召喚出来るなんて……」

祖母は孫娘の前で、当時、夫を召喚した時のジェスチャーをしただけで、まさか再び召喚出来るとは思わなかった。

それに彼女が「魔法は消滅した」と言ったが、どういう意味なのだろうか。

「……………」

アルシオンは老女に目を向けて、口を開く。

「オレを召喚したのは貴女ですね？」

「……………ええ、そういう事になるわね。」

でもおかしいわ…60年前にいきなりこの世界から魔法が消えて、今になってそれが使えたなんて…」

「60年前？魔法が消えた？一体何の事ですか？言っている意味が分かりませんか？」

アルシオンは老女の言葉が理解出来ない。

60年前だとか、魔法が消えたとか、何を言っているのだろうか？彼は此処に来る前の事を思い返した。

亡き母から『神の心』を授かり、故郷である 그리스ナ列島からハルケギニアに旅立とうとすると、いきなり目の前に楕円形の光る鏡が現れ、何気なく、そこに飛び込んで、この部屋の天井から落ちて今に至るのである。

アルシオンはそれをこの二人に自分の経緯を説明したのである。

「それにオレの居た世界では魔法はまだ使えた筈だが…」

どうやらアルシオンは今から60年後の世界に召喚されたようだ。

だが、今の世界は魔法が消滅して使えない筈なのだが。

「アルシオンさん、貴方のその様子じゃ、本当に何も知らないようね。」

60年前に突然、ハルケギニアから魔法が消えてしまったのよ。

魔法だけでなく、幻獣や魔物達、マジックアイテムなど、とにかく魔法やそれに繋がっているモノ全てが何の前触れもなく、消えてし

まっつて…」

老女はその当時の事を悲しい表情になって話した。

当時、老女がトリステインと言う国の大貴族の娘だった頃、自分の召喚した少年が老女の為に、アルビオンと言う7万の大軍に突っ込んで、帰らぬ人となり、暫くすると、突然、魔法が消えたのだ。

何故魔法が消えたのか、現在もその真相が解明されていないが、魔法が使えなくなると、ハルケギニア全土の平民達が暴動を起こし、自分達を苦しめた貴族に報復を始めた。

魔法が使えなくなった貴族^{メイジ}は報復に狂った平民達の刃によって一人、また一人倒れ、老女の家族や学院の教師や生徒達の殆ど全てが彼らによって倒れ、次のターゲットにされた自分は学院で働いていた一人のメイドに助けられた。

その時に老女は自分のお腹に命が宿っている事に気付き、助けにくれたメイドの故郷に身を隠し、そこで娘を生んだのだ。

平民の暴動は20年以上続き、老女はその間に娘を育て上げ、暴動が治まった頃に、娘とメイドと共にその地を離れ、メイドのいとこの元に身を寄せ、素性を隠しながら、今まで生きてきたのだ。

「私は貴族だった事をずっと隠して、平民として60年間生きたのよ…」

「……………」

「やがて娘は結婚して、5人の孫が出来たのよ。しかもみんな女の子よ。」

そして、この子が未っ子のルーシーよ。

ルーシー、アルシオンさんにご挨拶なさい」

ルーシーと言う少女は祖母に促され、自己紹介する。

「は、初めまして、私はルーシーです！」

アルシオンの顔を見て、ルーシーは真っ赤になりながら自己紹介した。

「アルシオンです」

普通に挨拶した。

老女はニコツと優しく微笑み、名乗る。

「アルシオンさん、私はルイズです」

ルイズと言う老女とアルシオンは出会いからスタートしたのだった。

ルイズの娘と末の孫娘（前書き）

リアルが忙しくて、全く執筆出来なかったのですが、時間が取れたので、投稿しました。

ルイズの娘と末の孫娘

ルイズの孫娘のルーシーが母親を呼びに祖母の部屋を出ていくと、ルイズとアルシオンはそこで二人きりとなった。

「アルシオンさん…聞きたいのだけれど、貴方、ご家族は？」

「居ません。」

つい最近、最後の肉親だった母が亡くなりましたから」

「そう…ゴメンなさいね、辛い事を聞いてしまって…」

ルイズは申し訳なさそうな表情で謝罪した。

「気にしないで下さい。」

それに、オレはもう子供じゃありませんから、一人で生きていきます」

「……それで、これからどうするの？」

「世界中を旅しようと思います。」

色々な世界を巡り、様々な事を学びたいので」

そんな話をしていると、ルーシーが母親らしき女性を連れて部屋に入ってきた。

「お母さん、どうしたの？……それにこちらの方は？」

彼女はルーシーの母親でルイズの娘のようだ。

60歳近い母親ゆずりのピンクブロンドの中年女性で、少しキツそうな雰囲気醸し出している。

「マリン、紹介するわ、この人は……」

ルイズは娘であるマリンと呼ばれた女性にアルシオンを紹介し、これまでの事を説明した。

「……召喚って、お母さん、魔法はもう使えない筈よ。

魔法は私が生まれる前に消えたんでしょ？」

ルイズの話にちょっと困惑気味のマリンにルーシーが横やりを入れる。

「お母さん、ホントよ！お婆ちゃんが杖を上を上げたら、この人が此処に落ちてきたんだもん！」

「ルーシー、貴女はちょっと黙ってなさい！……あのね、お母さん、そんな話は私はとても信じられないわよ、だから……」

信じないマリンにため息をついたルイズは娘の言葉を途中で遮る。

「マリン、貴女は私の話を信じてないようだけど、どんな理由にして、このアルシオンさんが私に召喚された事に変わりはないのよ。だから、今日からアルシオンさんの面倒は私が見るから」

「な、何ですって！？お母さん、何言ってるのよ！？」

「エーッ！お婆ちゃん、アルシオンさんは家で暮らすの？」

ルイズの言葉に驚く娘と孫娘であるが、ずっと静観していたアルシオンがルイズに話し掛ける。

「ルイズさん、勝手に決めないで下さい。

オレは貴女の世話になるつもりはありませんから。

それに此処に居る理由がないのでオレはもう帰ります」

ルイズとその家族に一礼して、此処を出ようとするアルシオンをルイズが引き止める。

「アルシオンさん、お待ちなさい。

私が勝手に話を進めた事で気を悪くしたのなら謝るわ。

でも、貴方は世界中を旅すると言ったでしょ？お金はあるの？」

「ありませんよ、別にそれがなくてもやっていけますので」

「……強がりはお止めなさい、旅をするならそれなりのお金が必要よ。暫く此処に住んで、その資金を蓄えて行くといいわ」

「……………」

ルイズの言っている事は確かだが、相手はアルシオンである。

『神の心』を母から授かった彼には食事、睡眠などの必要がないのだ。

普通の人間なら必要なのだが…。

なので、ルイズの提案を拒否しようとする、アルシオンの背後か

ら声が聞こえる。

『アル、ルイズさんの話を受け入れなさい』

アルシオンの母、シーラであった。

『母さん？』

テレパシーでシーラと会話する。

『いいんじゃないかしら？別に急ぎの用がある訳じゃないのだから。それにアルが召喚されたこの世界の事が気になるわ。だから当分、此処に住んで『魔法のないこの世界』を調べてみましょう』

『……そうだな、魔法が消えた事とか60年前の事とかを調査する必要があるな。分かった、そうしよう』

シーラは霊体なので、ルイズ達には彼女が見えず、声も聞こえない。アルシオンはルイズに向かって頭を下げた。

「分かりました。

ルイズさん、暫らくの間、お世話になります。どうか宜しくお願いします」

「こちらこそ宜しくね、アルシオンさん」

アルシオンがルイズの提案を受け入れ、彼女はニコツと微笑んでいると、マリリンが慌てて反対する。

「ちょ、ちよつとちよつとお母さん！何て事…」

「家は食堂と宿を営んでいるわ。

そこには沢山、部屋があるから、お好きな部屋を選んでちょうだい」

抗議しようとする娘をスルーして、ルイズは杖をついて立ち上がり、アルシオンを部屋に案内した。

「……………アルシオンさんと一緒に暮らすのね…」

ルーシーは顔を赤らめて、小声で呟いた。

ちよつと嬉しそうな表情をしている事に本人は全く気付いていない。

そんなルーシーはウキウキした足取りで、ルイズとアルシオンに付いていったのだが、マリンも追い掛けるように付いていった。

ルイズとルーシーがアルシオンを部屋に案内している時にマリンが母親と娘に反対意見と説得を試みたが、それをかわされ、最後は渋々とアルシオンを受け入れたのである。

（全くもう、お母さんったら！……………カトレアはともかく、レオナがこれを知ったら…）

心の中でそう呟いたのだった。

カトレアとレオナとはマリンの娘のようだ。

部屋に到着し、適当に部屋を選ぶと、ルイズからその部屋の鍵を渡され、ルイズは自分の部屋に戻り、マリンとルーシーは仕事があるからと言って、食堂に戻っていった。

与えられた部屋でアルシオンはシーラを呼んでテレパシーで会話する。

『アル、取り敢えず、此処で生活しましょう。』

『そうすれば徐々に全てが明らかになると思っから』

『……ああ、ルイズさんの好意は有り難く受けておかないとな』

ルーシーが夕飯に呼びに来るまで、部屋で寛ぐのだった。

ルイズの家族（前書き）

ルイズの家族設定は彼女の亡き家族の殆んどの部分と一緒にしました。

娘マリンがカリリーヌ似、娘婿サムエルがヴァリエール公爵似、長女レオナがエレオノール似、次女カトレアはそのまま、5女ルーシーはルイズ似です。

三女と四女はオリキャラで出すかどうかは現在検討中です。

ルイズの家族

夕飯の時間になると、アルシオンの部屋にルーシーが入ってきた。

「アルシオンさん、ご飯が出来たから呼びに来ましたよ、早く行きましょ」

「分かった、行こうか」

ルーシーと共に食卓に向かうとそこにはルイズとマリン、そして、娘の夫らしい中年男性が居た。

「あら、やっと来たわね、アルシオンさん。
さあ、そこに座ってちょうだい」

ルイズに指定されたイスにアルシオンが座ると、ルーシーは彼の隣に腰掛けた。

「お義母さん、彼ですか？お義母さんが召喚したと言っ……」

男性はルイズにアルシオンの事を尋ねた。

「そうよ、サムエル。」

こちらはアルシオンさんよ。

今日から我が家で生活する事になったわ」

「そ、そうですか……まあお義母さんがそう仰るなら私は別に構いませんが……」

サムエルと呼ばれた男性はルイズがアルシオンを受け入れたので、彼も戸惑いながら、受け入れた。

「もう、サムったらホントにお母さんに頭が上がりえないのね…」

マリンはそんなサムエルにため息をついて呆れた。

「マ、マリン！お義母さんが彼を受け入れたんだぞ、それに、反対する理由もないんだから…」

「はいはい」

サムエルはマリンにオドオドしている。

どうやら、彼はルイズとマリンに弱いみたいだ。

「ねえお婆ちゃん、お父さん、お母さん、あたしお腹すいたよ。もう食べようよ」

ルーシーが腹ペコなので、祖母と両親に食事しようと呼ぶ。

「あら、ルーシー、ゴメンね。」

でもレオナとカトレアが帰ってくるまで待つてて」

「お婆ちゃん…もう、お姉ちゃん達ってこんな時に限って遅くなるんだから！」

ルーシーは空腹のせいもあって、不機嫌モードに入った。

「ルーシー、あの二人ならもうすぐ帰ってくるからそんな顔はやめ

なさい」

「お父さんの言う通りよ、ルーシー。
もう子供じゃないんだから少しくらい落ち着きなさい」

「ム~~~~ツッ!」

両親に注意されたルーシーは空腹もあって、不機嫌モードに入ってしまった。

可愛く頬を膨らませながら……

ルイズ達はアルシオンに自己紹介し、それが終わると、二人の女性が入ってきた。

「ただいま……やっと仕事が終わったわ……」

「遅くなってゴメンなさいね、みんな」

金髪とピンクブロンドの二人の女性が、食卓に現れた。

一人は顔は母親似で、金髪は父親似である。

もう一人はピンクブロンドの物腰が柔らかそうな女性である。

「二人ともお帰りなさい」

「やっと戻ったか」

「レオナ、カトレア、お帰り。

ちよつと二人に紹介したい人が居るのよ」

ルイズ、サムエル、マリリンが女性二人に食卓に座らせようとすると、彼女らがアルシオンを見て、マリリンに尋ねる。

「お母さん、この人は？」

「あら、お客様？とても素敵な方ね」

マリリンはイスから立ち上がって、アルシオンに手を向けた。

「……今日から家で暮らすことになったアルシオンさんよ。

アルシオンさん、この二人に貴方の事を紹介して」

マリリンに娘二人に自己紹介するように言われると、彼は頷いて名乗ろうとすると、金髪の女性が母親の発言に驚く。

「ちよつと！？知り合いでもないこの人が家で暮らすってどう言う事よ！？しかも男の人を！」

突然の事なのでパニックになった。

「あらあら、驚いたわ。

でもいいんじゃないかしら？ハンサムなお方ですし、私は大歓迎だわ」

ピンクブロンドの女性は反対するどころか、知らないアルシオンを歓迎しているのだから、同時に彼女の清楚で優しそうな瞳からは見えない淫らなモノが漂ってきた。

「レオナ、カトレア。

アルシオンさんについては私が説明するわ。

この人はね……」

ルイズは二人にアルシオンを召喚した事、彼の旅立ちの資金を十分に蓄えるまでここに住む事になった事を説明した。

「召喚したってお婆ちゃん、もう魔法は昔になくなって使えない筈よ……」

「あら、それはお婆ちゃんがルーシーと同じくらいの歳まで使えたと聞いてるわ。

でも私はどうでもいいけどね」

話を聞いた二人はそれぞれの感想を述べた。

「とにかく、アルシオンさんはそれまで家で生活するのよ。マリンとサムエルとルーシーは了承したわ」

ルイズが二人にそう言うのと金髪の女性は先程の威勢が失せ、諦めたような表情になった。

サムエルと同じ感じである。

どうやらこの家庭はルイズに頭が上がらないようだ。

ルイズ一家はアルシオンに改めて自己紹介した。

ルイズ 76歳で宿屋の元経営者でこの一家の家長。

夫は60年前にアルシオンと同じように召喚された黒髪の少年だったが、当時の戦争で帰らぬ人となった。

彼が遺した娘マリンを産み、親友となったメイドの手を借りてマリンを育て上げ、そのメイドのいとこで以前、世話になった宿屋の女性とそのオカマ風の父親の援助によって、一代で宿屋『ゼロ』を築いた。

そして数年前に高齢を理由に経営から退き、マリんに店を委ね、隠居し、今に至るが、何故か家族はルイズに頭が上がらない。

マリン 59歳でルイズの娘で『ゼロ』の経営者。

幼なじみのサムエルの妻で5人の娘の母親。

母親の苦勞をずっと見てきたのか、かなりしつかりした女性。

他人や自分に厳しいところがある。

なんでもルイズの母にどこか似ているらしい。

サムエル 59歳で『ゼロ』の店長で幼なじみのマリンの夫。

婿入りで、5人の娘の父親。

ルイズとマリンからはサムと呼ばれている。

マリンと違って、優しい性格…と言うよりちょっとヘタレでマリンの尻に敷かれている。

子煩悩：いや、かなりの親バカで、特に末っ子のルーシーを可愛がっている。

こちらもルイズの父親に似ているそうだ。

レオナ 35歳でルイズの孫娘で、マリンとサムエルの長女。

プライドが高く、エリート意識が強い。

その為、離婚歴4回あり、付き合ってきた男性と勤めた職場は長続きしない。

嫌な事があると末っ子のルーシーをストレス解消として苛めている。

現在は『ゼロ』の食堂で、厨房の責任者をしている（接客は彼女の性格に問題があるのでマリンに外された）。

こちらもルイズの一番上の姉に似ているらしい。

カトレア 30歳でルイズの孫娘で、マリンとサムエルの次女。

彼女をカトレアと名付けたのはルイズである。

ルイズが慕っていた二番目の姉カトレアのように優しく、包容力のある女性になってほしいと願って名付けたそうだ。

そして、カトレアはルイズの望み通りに成長し、彼女の亡き姉のように慈愛に満ちた女性になった。

仲のいいルーシーに懐かれている。

『ゼロ』の接客の責任者だが、かなりの有能で、マリンの頼れる片腕的存在であり、マリンは『ゼロ』をゆくゆくはカトレアに継がせようと思っている。

だがそんなカトレアにあまり良くない噂があるらしいが、それは何なのかは不明。

ルーシー 15歳でルイズの孫娘で、マリンとサムエルの5女。

ルイズの少女時代とは対照的に素直で可愛らしい少女。

ルイズがルーシーを昔の自分のようにならないように素直ないい子に育てたらしい（悪く言えば調教）。

家族と近所ではマスコットの存在で、「孫にしたい女の子」「娘にしたい女の子」「妹にしたい女の子」「トリスタニアの天使」などと評判の少女である。

マリン（厳しい）とレオナ（意地悪）が苦手であり、カトレア（優しい）を慕っている。

将来はカトレアのようになりたいと言っているがルイズ以外の家族

から「それだけはやめてくれ！」と懇願（猛反対）されており、何故それがダメなのか、ルーシーには分からない。

理由を聞いても「まだ知らなくていい」と言われ、教えてくれないらしい。

『ゼロ』の看板娘で、癒し系の女の子である。

他に三女にセリーヌと四女にローザと言う姉が居るのだが、二人は既に結婚して家を出ており、子供が居るらしい。

ルイズ一家の自己紹介が終わると、今度はアルシオンが自己紹介（大部分を捏造した）し、それが終わると、夕食を食べ始めるのだった。

ルイズの家族（後書き）

ルーシーはルイズ似ですが、性格は全く違う設定にしました。

性格はアダルトゲームで名作『TO HEART2』の柚原このみにしました。

オレの好きなキャラです…

ルイズ、過去を語る。(前書き)

ルイズの60年間を語る話です。

ルイズ、過去を語る。

夕食が終わり、後片付けを済ませたルイズ一家は就寝の時間まで、家族の団欒などとして、時間を潰した。

アルシオンもその中に加わり、彼の左側にルーシーが座り、右側にカトレアが座り、三人で、楽しく話をしていた。

そんな三人をルイズは微笑ましい表情で見つめ、サムエルとマリンは仕事の話をしており、レオナは面白くないような感じで三人を見つめた。

夜が更け、家族はそれぞれの部屋に戻り、アルシオンも部屋に戻った。

彼は明日から、ここで働く事になり、早朝になったら、店の清掃から始めるらしい。

アルシオンに仕事を教える教育係はルーシーがやる事になった。

初めはマリンがカトレアを教育係に指名したのだが、ルーシーがやりたいと自分から志願し、妹思いのカトレアは笑顔で、教育係をルーシーに譲ったのである。

ルーシーは譲ってくれたカトレアに飛び込むように抱きつき、感謝し、「明日からお仕事教えてあげるね！アルお兄ちゃん！」と嬉し

そうにアルシオンに明るい笑顔を向けた。

因みに家族はアルシオンを『アル』と呼ぶようになった。

アルシオンが家族にそう呼んでくれと頼み、家族はそれを受け入れ、一番年下のルーシーはアルお兄ちゃんと呼ぶようになった。

家族もアルシオンに自分達に敬語と言った他人行儀は止めるよう頼み、彼もそれを受け入れた。

眠る必要がないので、夜の散歩でもしようと思い、外に出ようとすると、ドアをノックする音が聞こえ、開けてみると、杖をついたルイズが居た。

「こんな時間にゴメンなさいね、アル。
少し貴方とお話したいのだけどいいかしら？」

「ルイズさんか、構わないよ、さあ入ってくれ」

部屋に入れ、彼女を近くにあるイスに座ってもらった。

ルイズはまだ少女だった頃の話始めた。

かつて自分が当時、トリスティンと言う国で、大貴族だったヴァリエール公爵家と言う貴族の娘だった事。

その頃は貴族至上主義で、平民を支配していた事。

当時はハルケギニアでは、まだ魔法が使えたのだが、自分だけ魔法が使えず、周りからバカにされ、周囲を見返そうと努力してきたが、十分な成果を得られなかった事。

トリステイン魔法学院に入学し、使い魔召喚の儀式で、後に夫で、マリンの父となるサイトと言う黒髪の平民の少年を召喚し、彼の意志を無視して、無理矢理使い魔にした事。

彼とは最初はお互いに唾み合っていたが、共に過ごす内に惹かれ合い、知らず知らずの内にサイトと愛を育むようになった事。

そして、アルビオンと言う国との戦争で、サイトはその大軍にたった一人で立ち向かい、帰らぬ人となった事。

サイトの死を嘆き、彼の後を追いつけようと自殺を図ろうとしたが、一人のメイドに止められ、説得されて思い止まった事。

そして、自分のお腹に一つの命が宿っていた事。

だが妊娠中に突然、ハルケギニアから魔法が消滅し、それがきっかけで貴族に恨みを持った各国の平民達が暴動を起こし、組織を立ち上げ、貴族を大量虐殺を始めた事。

ルイズの両親と一番上の姉、友人達の殆んどが平民達に殺されたが、自分と二番目の姉はメイドに助けられ、彼女の故郷で匿ってくれた事。

そこで、マリンを無事に出産したが、その後、生来重病だった姉が

生まれたマリンを笑顔で見届けるようにして、息を引き取った事。

最後の肉親を失ったが、生まれたばかりのマリンがいるので、ルイズは貴族であった事を隠し、平民として生きようと決心した事。

平民による暴動は20年以上続き、その間に、親友となったメイドの親戚が当時、経営していた宿屋（前に一度、ルイズとサイトがアルバイトしていた）で働きながら、マリンを育て、第二の人生を歩み始めた事。

平民として宿屋で一生懸命働き、お金を貯め、彼らの援助により、宿屋『ゼロ』を開店した事。

成長したマリンはやがて今の夫で幼なじみであるサムエルと結婚し、5人の孫娘を授かり、その内の三女と四女は嫁に行き、何人かのひい孫がおり、その中にルーシーと歳が近い子が居るとの事。

数年前にそれまでオーナーとして宿屋を経営していたルイズが高齢と健康上の理由により、経営から退き、マリんに宿屋を譲り、その後、隠居して今に至る事を話したのである。

「……………そうか、苦勞してきたんだな、ルイズさん」

「……………私にとってサイトが…夫が全てだったわ…夫をあの戦争で失ってから、自分自身の中が空っぽになった感じになって…生きる気力を失って死のうとしたら、シエスタに平手打ちされて……」

「シエスタ？…ルイズさんを助けたメイドの人か？」

「そう、そのシエスタに怒られたのよ。」

「ミス・ヴァリエールが死ねば、サイトさんが喜ぶと思ってるんですか！？」ってね…」

「……………」

「シエスタに叱咤激励されて、生きる気力を取り戻して、色々あったけれど、娘や孫、ひい孫を授かって、私は本当の幸せを手に入れたわ…」

「ルイズさん、よく頑張ったな。」

諦めなかったから、今の幸せがあるんだよ」

「ありがとう、アル。」

でもね、私一人では何も出来なかったわ。」

もし、シエスタが居なかったら…私を叱ってくれなかったら…私とマリンは生きていないと思うわ。」

孫もひい孫も生まれこなかったと思うわ」

「……………」

「シエスタは私と家族の命の恩人で親友なのよ。
今の私がこうしていられるのは、彼女のお陰なのよ、感謝しても
きれないくらいにね」

「素晴らしい友達を持ったな、それでシエスタさんはどうしてるんだ？」

「元氣よ、たまに家に遊びに来てくれるから……そうだが、今度シエスタが家に来たら、アルに紹介してあげるわね。私にとって、かけがえのない大事なお友達よ」

「ああ、シエスタに会えるの楽しみにしているよ」

アルシオンにシエスタを紹介する約束をしたルイズは杖をついてイスから立ち上がり、アルシオンの部屋を後にした。

ルイズが自室に戻っていくと、アルシオンは部屋を出て、外に出て夜空を見上げながら、街を散歩した。

彼は夜の散歩を好むようだ。

（ルイズさんは薄々気付いているようだな、自分はもう長くない事を……その時が来るまでここに居よう）

ルイズが長くない事を悟ったアルシオンは彼女の最期を見届けるまで家族と過ごそうと決めたのだった。

無数の星が綺麗に輝いている夜空を眺めながら……

ルイズ、過去を語る。(後書き)

次回はアルシオンが宿屋で働き始めます。

アルシオン、宿屋で仕事する。（前書き）

アルシオンが宿屋で仕事をします。

昼は食堂、夜は酒場です。

アルシオン、宿屋で仕事する。

夜が明け、ルーシーがアルシオンの部屋にやってきた。

ノックすると、アルシオンがドアを開けた。

「お早う、ルーシー」

「アルお兄ちゃん、お早う！ねえ早くお店に行こう！」

「ああ」

ルーシーに手を引かれて、外に出ると、ここの従業員らしき人達が店とその周辺の清掃を始めていた。

レオナとカトレアもそこに居て、彼らと清掃をしている。

アルシオンを連れてきたルーシーは従業員達に一旦、清掃を中断してもらい、彼らにアルシオンを紹介した。

「アルシオンです、今日からこちらでお世話になります。みなさん宜しくお願いします」

簡単に挨拶すると、従業員全員がアルシオンを見てポカーンと呆然とした。

そして直ぐに我に返った何人かの従業員がキヤーキヤーと黄色い声を上げ、他の呆然としていた従業員もその声で我に返り、同じように黄色い悲鳴を上げた。

「キヤー！カッコいい！！」

「ス、ステキな人だわ……」

「いい男ね…今日からこの人と働けるなんて…よし、あたし頑張っちゃう！」

従業員一人一人がそれぞれの感想を呟き、普段よりやる気を出すのだった。

そう、『ゼロ』で働いているの従業員達はみんな若い女の子である。女の子達が何故こう騒いでいるのかと言うと、原因はアルシオンである。

彼は相当な美男子で、二メートル近くある長身に頼もしい程に逞しく、モデル並のスタイルをしているのだから、女の子達が興奮して騒ぐのは無理もないかもしれない。

「ホラホラ、静かにして！みんなの気持ちはよく分かるけど、そんなに騒いだら…」

ルーシーが慌てて女の子達を落ち着かせようとしている。

「ちょっと、うるさいわね！アンタ達、外で何騒いでるのよ！？」

「あらあら、どうしたの？外から大きな声が店内に聞こえたけど」

店の中から、レオナとカトレアが外の騒ぎを聞きつけてきたようだ。

「レオナお姉ちゃん、カトレアお姉ちゃん…」

二人の姉の登場でさっきまでの黄色い騒ぎが、直ぐに治まり、静かになった。

殆んど女の子はレオナの顔を見て、嫌そうな、苦手そうな表情になるが、そんな彼女らをレオナが睨み付ける。

「アンタ達、今は仕事なのよ！遊んでないでとっとと仕事しなさい！」

レオナの迫力のある怒声に女の子達は慌てて、ハ、ハイ！と返事して、持ち場に戻っていった。

ルーシーが騒ぐ女の子達を焦って落ち着かせようとしていたのは、レオナが騒ぎを聞きつけてくるからであるのだが…遅かった。

この様子からして、女の子達はレオナをよく思っていないようだ。

レオナはルーシー達に背を向けて、自分の仕事に店内に戻っていった。

「みんな、あまり騒がないでね。

アルがステキだから浮かれるのは分かるけど、それはお仕事が終わってからにしてね」

レオナが居なくなつて、カトレアが女の子達に優しく注意すると、先程のレオナによる重い雰囲気が消えた。

「それにレオナ姉さんは先日、離婚したばかりだから、レオナ姉さんの近くで男の人の話をするのは止めてあげてね」

優しいような顔して、余計な事を言っけししまい、再び気まずい空気が漂い始めた。

「カトレア！余計な事を言わないでよ！さっさと行くわよ！」

「ハイ、すぐに行くわね」

余計な一言を言ったカトレアをレオナが怒声で呼び、二人は店内に入っけいった。

二人の姉が居なくなると、ルーシーと女の子達は清掃作業を再開した。

「ルーシー」

「アルお兄ちゃん、何？」

「オレは今から何をすればいいんだ？お前はオレの教育係の筈だが？」

「あつ！？ゴ、ゴメンね！アルお兄ちゃん、すっかり忘れちゃったよ！じゃ、こっち来て」

レオナとの事でアルシオンの存在をすっかり忘れていたらしい。

「全く、すっかりしてくれよ、ルーシー先輩」

「ホントにゴメンね…アルお兄ちゃん…」

呆れ顔で、ルーシーを先輩と呼び、そんな頼りない先輩から教育を受けるのだった。

午前中近くになると、清掃が終了し、『ゼロ』が開店した。

この店は、昼は食堂として、夜は酒場として経営しているとルーシーから聞いた。

宿屋は基本的に年中無休だそうだ。

午前中になり、食堂の開店時間になると、羽扉がバタン！と開き、客が店内になだれ込み、ほんの数分で満席となった。

そんな中、給仕の女の子達は慌ただしく、料理を運んでいる。

ルーシーはアルシオンを店内の隅に連れていき、そこで、給仕の女の子の仕事を見学するように言って、自分の仕事に戻っていった。

女の子達は客からオーダーを取り、駆け足で速やかに、厨房に向かっていく。

出来上がった料理をトレーに乗せて、片手で器用に料理を注文した客のテーブルに運ぶ。

アルシオンは彼女らのそれぞれの動作を見て、それを頭にインプットした。

食堂では創業者のルイズの言い付けで、酒は一切出していないそう
だ。

夜ならいいが、昼間に酒を飲むのはあまり好ましくないとの事らしい。

開店して三時間経つと、それまで満席だった店内は客の数が大幅に減っていった。

落ち着いたようだ。

それを見計らって、ルーシーがアルシオンの元に来た。

「お店を見学して、どうだった？アルお兄ちゃん」

「スゴいな、開店と同時にお客さんがあんなになだれ込むんだからな。

何時もこんな感じなのか？」

「うん、ウチのお店はご飯がおいしい！ってこの町じゃ結構有名なんだよ。

お婆ちゃん直伝のお料理だもんね、ホントにおいしいんだよ、お婆ちゃんのお料理って」

「だろうな、お客さん達の料理を食べている時の顔はみんな笑顔だったしな」

「うん、お婆ちゃんのお料理は最高においしいよね！」

祖母を誉められて、ルーシーは嬉しい顔をした。

確かに、料理を食べている客は幸せそうな表情になっていた。

まるで安心したような感じで…

アルシオンも昨日の夕食を食べ、とてもおいしかったので、よく分かるのだ。

ルーシーの話によると、ルイズが家族全員に自分の料理の技術を教えたそうだ。

ルイズの技術を一番に吸収したのはレオナであり、彼女は厨房を任せられ、料理を出していると言う。

見学は食堂の時だけで、夜に開店する酒場で本格的に働く事になった。

食堂より酒場の方が客の出入りが激しいそうだ。

酒場は主に酒を客に提供するが、料理は殆んどおつまみ程度だそうだ。

最後の客が会計を済ませ、店を出ていくと、食堂を閉め、女の子達は直ぐに片付けと酒場の準備を始めた。

アルシオンもルーシーの指示で、女の子達と作業に入った。

アルシオンと作業している女の子達は彼にいいところを見せようと、何時もより気合いを入れて作業に取り掛かった。

それはルーシーも同じで、食堂の時はアルシオンが店内の隅で見ているので、女の子同様にいいところを見せようと、何時もよりやる気を出して仕事したのだ。

夜になると、酒場として開店すると、昼時と同じように、なだれ込み、満席になった。

アルシオンは給仕として、現場に入った。

先ずは来店した客から注文を取り、駆け足で速やかに厨房に向かう。

注文を厨房に伝え、次に、他の客の注文を取ってくる。

そして、出来上がった料理と酒をトレーに乗せて、片手で器用に持って注文した客のテーブルに運び、それが終わると、近くのテーブルに食べ終わった皿と空になった酒の瓶を見つけたら、それらを片付けて、汚れた皿は厨房の隣にある洗い場に運び、瓶は店の裏側に運ぶのだった。

食堂で見た女の子達のやり方通りに動いたのだ。

片付けが終わって、フロアに戻り、客からオーダーを取ろうとする

と、ルーシーが駆け寄ってきた。

「アルお兄ちゃん、スゴい！こんなに早くお仕事覚えるなんて！」

アルシオンの仕事の飲み込みの早さに驚いたのだ。

「そうか？食堂の子達のやり方を見て、それをマネしただけだが？」

「それってスゴい！見ただけで覚えたんだもんね」

「それよりルーシー、今はおしゃべりしてるヒマはないぞ、ドンドンお客さんが入ってきてるからな」

「あつ…：そうだね、じゃアルお兄ちゃん、分からない事があつたら言ってね」

「ああ、その時は頼むよ」

「任せて！」

二人は仕事に戻っていったのだった。

深夜になると、最後の客が店を出ると同時に酒場の営業が終了した。

従業員全員が一斉に片付けを始め、それが終わると、本日の仕事は終了となった。

女の子達はそれぞれの部屋に戻り、アルシオンとルーシーもお互いを労い合い、部屋に戻っていった。

アルシオンは部屋で特にする事がないので、夜空を見に部屋を出ようとすると、コンコンとドアをノックする音が聞こえた。

ドアを開けると、そこにレオナが立っていた。

「ちょっと…いいかしら？」

「いいよ、入ってくれ」

レオナを部屋に招き入れた。

「オレに何か話でも？」

「ええ、ちょっとね…」

レオナはアルシオンに何の用があるのだろうか？

アルシオン、宿屋で仕事する。(後書き)

今回はレオナがアルシオンと…それは秘密で(笑)

次は『神の代行者の戦いと5000年前の歴史』を更新します。

長女レオナの変化（前書き）

何となくですが、タイトルを「晩年のルイズとその家族」に変更しました。

長女レオナの変化

「こんな時間にオレに何の用だ？」

「カトレアとルーシーから聞いたわ、貴方、初日は仕事を完璧こなしていたそうね」

「完璧かどうかは分かんが、オレは彼女達の仕事を見て、一つ一つの仕事のやり方を頭に入れ、実行しただけだ」

「それもルーシーから聞いたわよ、「アルお兄ちゃんお仕事スゴかったよ！」って、アルを誉めてたわ。

「やっぱり貴方は見掛けだけあって、有能なのね」

無表情でアルシオンを誉める。

「カトレアもアルを誉めていたわよ。何をやっても完璧だったって……」

カトレアからその話を聞いた時に、彼女の瞳が何やら妖しく輝いていたように見えたレオナは「またカトレアの『悪い癖』が出てきたわね……」と呟いた。

カトレアの『悪い癖』とは一体何の事だろうか？

「私はアルに忠告しに来たのよ、先ずは、ちょっと仕事ができるからってあまり調子に乗らないでね、図に乗ると痛い目を見る事もあるわ」

アルシオンに忠告しに来たようだ。

「ありがたく受け取ろう、だがオレはそんなへまはしないよ、どんな仕事だろうと気を抜かないよう心掛けているからな」

「ふうん……いい心掛けね、それならいいわ。」

後……カトレアに気を付けなさいね、貴方、あの子に『狙われてい』る『わよ』

「カトレアさんがオレを？何を言ってるんだ？」

「姉として、カトレアの事を悪く言えないわ、とにかくあの子に気を付けた方がいいわ」

「……よく分からんが、その忠告も受け取っておくよ」

「そうして頂戴、じゃ私は部屋に戻るわね、お休み」

「ああ、お休み」

レオナは部屋を出ようとすると、ドアの前で立ち止まった。

「……………」

何か考え事をしているようだが、直ぐにアルシオンに振り向いた。

「…もう少しだけお話ししましょう、アル、いいかしら？」

「構わないよ」

レオナは近くにあったイスに座り、アルシオンと話を始めた。

レオナは生まれて35年間の事を話した。

小さい頃はルーシーのように素直な女の子だったらしく、祖母のルイズによく懐いていたそうだ。

現役時代のルイズが『ゼロ』で作っていた料理が大好きで、「私もお婆ちゃんみたいな料理を作りたい！」とルイズにお願いし、料理の技術を一生懸命、吸収したのだ。

その努力の甲斐があつて、レオナは家族の中で、一番美味しい料理を作れるようになったらしい。

そして、働ける歳になると、『ゼロ』の厨房を任され、ルイズから受け継いだ料理を出していると言う。

レオナは性格に問題があるのか、妹のルーシーから苦手に思われ（嫌っているのではなく、苦手なだけ）、『ゼロ』で働く従業員の女の子達から敬遠されている。

成長する毎に、無意識にプライドが高く、エリート意識が強くなり、相手を見下すようになったのだ。

小さい頃はそうじゃなかったのだが、年頃になると、何の理由もきつかけもなく、現在の性格になったようだが、何故こんな風になっ

たのか、自分の性格をよく知っているレオナ自身も全然分らない
そうだ。

『ゼロ』で働く前は別の職場で働いていたらしいが、その性格が災
いして、トラブルをよく起こし、長続きせず、職を転々とし、最終
的にはそんな娘を見兼ねた母のマリンがレオナを実家に戻し、『ゼ
ロ』で働かせているそうだ。

マリンはレオナに『ゼロ』の全業務をやってもらおうと最初に接客
をさせたが、プライドの高い彼女に勤まる筈がなく、客とトラブル
を起こしたり、給仕の女の子達に恐がられ、コミュニケーションが
取れないので、とうとう、マリンからレオナは料理が一番得意と言
う理由で、厨房に押し込められたと言う。

レオナはかなりの美人でカトレア程ではないが、スタイルもよかつ
たので、彼女の性格を知らない男性に人気があったが、いざ付き合
ったら、直ぐに別れると言うパターンが多く、結婚しても当然、長
続きしなかったと言う。

4回も結婚していたが、直ぐにスピード離婚してしまい、最後はレ
オナの噂が町中に広がり、いくら美人でも性格がアレじゃあと言う
事で彼女に言い寄ってこなくなったそうだ。

「……………」

「気が付けば、私はもう三十代半ばになって…私はどうしてこうな
のかしらね…」

自嘲気味でアルシオンに語る。

「どうして『レオナ姉さん』はオレにそんな話を？」

家族として、レオナを『レオナ姉さん』と呼んだ。

「分からないのよ、何となくアルに話したくてね…悪かったわね、こんな話をして…」

力ない笑みを浮かべるレオナに尋ねる。

「レオナ姉さんは今の自分を変えたい、そうだろ？」

「……………出来たらそうしたいわ」

「それが可能だと言えはどつする？」

「……………出来るの？」

「別の意味で『荒療治』になるけど、今直ぐにとは言わない、ゆっくり考え「やるわ」…早いな」

レオナは即決した。

「その『荒療治』で私が変われるなら、今直ぐにでもやるわよ」

「目が本気だな、いいんだな？」

「構わないわ、やってちょうだい、アル！」

アルシオンはイスから立ち上がり、レオナを立たせ、抱きしめ、キスをした。

「!?!?」

アルシオンにいきなりキスされ、パニック状態になり、暴れるが、体格差があつて、いくら抵抗しても無駄だつた。

暴れても、アルシオンのキスにより、徐々に抵抗が弱まり、とうとう、ウツトリした表情になり、自分から両手をアルシオンの首の後ろに回し、目を閉じて激しいキスを交わし、二人はベッドに倒れこみ、男女の夜の営みを始めるのだつた。

「……………コレがアルの言う荒療治…なの？」

熱く、激しい行為後にレオナが気だるそうに言うと、アルシオンは頷いた。

「ああ、言葉より、実際体感した方が効果があるからな、どうだつた？レオナ姉さん」

「……………今、頭の中が真っ白で何て言えばいいのか分からないわ…………」

「そうか、でも悪かつたな、激しくシテしまつて」

「フフ、いいわよ…アルのお陰で何だか心が軽くなつたみたい…ありがとう」

「いい顔してるよ、レオナ姉さ」「レオナよ」「？」

言い掛ける唇にそっと人差し指を押さえ、優しい笑みを浮かべた。

先程の険しく、ピリピリした表情がすっかり消え、普段のレオナとは思えない変貌ぶりである。

「アル、二人きりの時は『レオナ姉さん』じゃなく、『レオナ』って呼んでね」

「ああ、レオナ」

ベッドの中で抱き合い、そのまま眠りについたのである。

長女レオナの変化（後書き）

次回はカトレアを出そうと思います。

あまり評判がよくないカトレアの真相が明らかにならねえ！

カトレアの企み（前書き）

可愛いレオナ誕生です（笑）

ツンツンレオナよ、さらば！

カトレアの企み

レオナとの熱い夜を過ごし、早朝になると、アルシオンは彼女との行為で脱いだ服を着て店の掃除をしに部屋を出た。

レオナはアルシオンより先に部屋を出て、店の厨房に行った。

掃除はもちろん、料理の仕込みをしなければならぬので、少しだけ一休み（主に激しい行為でレオナの腰が抜けた為）して行ったのだ。

店の外に出ると、ルーシーと女の子達が集まっており、アルシオンが来た事で、全員揃ったらしく、みんなで朝の挨拶をすると、昨日と同じ店の清掃に取り掛かった。

「ねえねえ、アルお兄ちゃん」

「ん？」

「あのね、さっき此処でレオナお姉ちゃんに会ったの」

「レオナ姉さんに？それで？」

「何かね、何時もの『意地悪』レオナお姉ちゃんと違っちゃって言うか……上手く言えないけど、とにかくお姉ちゃんの様子が変わったの。アルお兄ちゃん、お姉ちゃんに何かあったのかな？」

「さあな、それは直接本人に聞かないと分からないだろう。」

例え、聞くこととしても、あのレオナ姉さんがそう簡単に教えるとは

思えんが」

レオナの様子がおかしい原因を作ったアルシオンはルーシーに知らないフリして話した。

実は、レオナからみんなには黙ってほしいと口止めされたのだ。

アルシオンはレオナとの関係を持った事を知られても構わないのだが、レオナはそうはいかなかった。

別に世間体とかを気にして口止めたのではない。

何でも、心の準備がしたくて、時間が欲しいらしい。

そんなレオナにアルシオンは特に理由を聞かず、彼女の意志を尊重し、周囲に関係を黙秘する事にしたのだ。

「そうだね、あのレオナお姉ちゃんがすんなりと教えてくれないよね…」

「だろ？もうお喋りはこの辺にして、とっとと掃除を終わらせるぞ」

「うん」

話を切り上げ、清掃を再開するのだった。

厨房にて、レオナは仕込み作業をしていた。

此処では普段、厨房を仕切っているレオナが仕込みをやっているのだ。

厨房で働いている他のコック達には食材の仕入れと厨房の清掃、そして滅多にないが、破損などで不足した調理用の器具の補充に当たっている。

厳しく、的確な指示を出し、コック達はピリピリした雰囲気の中で作業するのが日常である。

だが、今日は何かが違うのだ。

レオナが厳しい事に変わりはないが、その厳しさにコック達は違和感を感じたのだ。

何時もはその厳しさに『険』が含まれていたのだが、今はそれが感じられないのだ。

普段はトゲのある言葉でコック達に指図していたのだが、それが何と今はその指図にトゲが感じられないのである。

今までレオナのその険しい態度で、給仕の女の子達だけでなく、厨房のコック達に敬遠されていたのだが…

「おい」

「何だよ？」

準備作業している二人のコックがヒソヒソ話をしている。

「今日のレオナさん、何か変だと思わねえか？」

「お前もそう思うか？何時ものレオナさんじゃないよな」

「ああ、厳しいけど、こうトゲが感じられないんだよな」

「そうそう、オレ達はそれがイヤだったのに：今日のレオナさんどうしたんだろ？」

そんな彼らの後ろから怒鳴り声が聞こえた。

「そこの二人、手が止まってるわよ！それに仕事中に私語は禁止よ！」

「は、はい！」

「もう少ししたら、休憩に入るから黙って作業なさい、分かった？」

「……………」

「返事は？」

「は……………はい！」

「よろしい、じゃ私は今からちょっと事務所に行ってくるから、戻るまでお願いね」

その事務所に用があるらしく、彼らにニコツと優しい笑顔を向け、

厨房を出ていった。

レオナが居なくなると、厨房は騒がしくなった。

あの厳しいだけのヒステリーの塊だったあのレオナが自分達に笑顔を見せたのだ。

今までそんな事をしなかった彼女に戸惑い始めたのだ。

厳しいが、その声に何時ものつつけんどんじゃなく、優しさを感じたので尚更である。

母のマリンが居る事務所で用事を済ませ、厨房に戻る途中に偶然、妹のカトレアと廊下で会った。

「お早う、レオナ姉さん」

「あら、お早う、カトレア」

お互いに笑顔で朝の挨拶をする。

「あらあら、レオナ姉さん、何かいい事があったの？」

珍しく、レオナが笑顔なので、聞いてみた。

「べ、別に、何もないわよ！どうしてそんな事聞くのよ？」

「穏やかな顔してるからね 何時もの姉さんならそんな顔しないわ」

「そ、そう？心配しないで、何でもないから……」

カトレアとの話を切り上げて、この場を離れようとしたが、カトレアはそれを許さなかった。

「好きな人が出来たの？姉さん」

「そ、そんな人居ないわよ！そんな事よりカトレア、私はそろそろ仕事に行かないといけないから！じゃね！」

逃げるように厨房に向かおうとすると、カトレアがさり気なく、レオナの逃亡（？）を阻止した。

「退きなさいよ、カトレア！」

「それで姉さん、好きな人って誰かしら？」

「だから居ないって言うてるでしょ！いいから退いてよ！」

「姉さん、その人は私の知ってる方なの？」

レオナの話聞いていないのか、カトレアは姉の想い人をしつこく聞いてくる。

「あのね、カトレアも仕事があるでしょ？お互いにやらなきゃならない事があるんだから、もうこのお話はおしまいにして、仕事しましょ？ね？」

「そんな事はどうでもいいから、レオナ姉さん、お相手を教えて」

「カトレア……アンタって子は……」

仕事をどうでもいいと慈愛に満ちた笑顔で発言するカトレアに困惑してしまう。

此処でレオナみたいに、仕事に厳しいマリリンがそれを聞いたら何と言っのдарろつか？

「私に教えて、レオナ『お姉ちゃん（ハート）』」

「……………」

姉さんから『お姉ちゃん』と言い換え、相手を聞き出そうとしている。

レオナはカトレアの性格をイヤという程理解している。

カトレアはお淑やかで優しい女性だが、異常と言える程、執念深いのだ。

見掛けによらず、自分の知りたい事ややりたい事をやり遂げるまで、周囲の人間の都合を考えずに突っ走るのだ。

レオナはそんな妹がそれを途中で諦めたりするところを見た事がなく、やると決めたら、必ずやり遂げると言う恐ろしい執念の持ち主だと言う事をすっかり忘れていたのだ。

「お姉ちゃん 言えばスッキリするわよ」

「……………」

退路を断たれたが、それでも突破口を見つけようと考えていると、カトレアが両手を軽くポンと叩いた。

「なるほどね……私、分かっちゃったわ、レオナ姉さんの好きな人が」

お姉ちゃんから姉さんと呼び戻し、レオナの想い人の正体があったようだ。

「レオナ姉さんの好きな人は……ズバリ、アルね？」

「なっ……………!?!」

アルシオンの名前を出され、激しく動揺した。

「そうか、そうなのね、やっぱりアルなのね？とうとう姉さんに新しい恋人ができたのね」

「うう……………」

鋭いカトレアに見抜かれ、小さく唸る。

「でも、ルーシーがそれを知ったら悲しむかもしれないわね、あの子、アルを好きみたいだし……………」

レオナはカトレアの腕を掴み、厨房とは反対方向にあるワインなど

酒を貯蔵している倉庫に向かっていった。

「カトレア……この事は絶対に誰にも言わないでね、特にルーシーにはまだ知られたくないの、いいわね？」

「やっぱりレオナ姉さんもルーシーの気持ちに気付いていたのね？」

「私達だけじゃなくてもみんな知ってるでしょ？ルーシーがアルを好きだって事……」

「そうね、あの子ったら、何時でも何処でもアルを見ているから、バレバレよね」

ルーシーがアルシオンに熱い視線を向けている事は家族全員は知っているようだ。

「なら話は早いわ、お願い、ルーシーには絶対に……」

「分かってるわ、私もルーシーの泣くところを見たくないから誰にも言わないわ」

「ありがとう、カトレア……」

「それより姉さんをお願いしたい事があるの」

カトレアがレオナに頼みたい事があるようだ。

その言葉に何か嫌な予感がしたが、平静を装いながら聞いてみる。

「……………何よ？そのお願いって……………」

内心、用心して内容を尋ねる。

「今夜、アルを貸して」

カトレアの夜の相手としてアルシオンを姉から借りようとしているのだ。

カトレアの企み（後書き）

今回はカトレアがアルシオンと…レオナは妹の要求を受け入れるのか？それとも…

次は『神の代行者の戦いと5000年前の歴史』を更新します。

狙うカトレアとマリンの忠告（前書き）

風邪をひいてしまい、あまり調子よく執筆出来なかったな…

狙うカトレアとマリンの忠告

「何言ってるのよ、アンタは？」

「今夜、アルを貸して、ね」

「……………」

レオナにアルシオンを貸してと要求するカトレアに難色を示した。

アルシオンと男女の関係となったが、レオナ本人はアルシオンを束縛するつもりはないのだが、カトレアにだけはどうしてもアルシオンを貸す気になれないのだ。

確かにアルシオンと一夜を過ごした。

優しく抱かれ、激しく交わったあの夜の事が頭の中でフラッシュバックしてきた。

(何で私はこんな時に昨日の事を思い出すのよ、もう!……………でもアルは凄かったわ……………何回気を失った事か……………)

無意識にウツトリした表情になり、アルシオンとの情事を思い返している、カトレアがニコニコしていた。

「あらあら、レオナ姉さんが何回も失神する程スゴいのね、アルは」

「なっ!…!ちょっとカトレア、私の心を読まないでよ!」

「あら、ゴメンなさい。
でも分かつちゃうんだもの、幼い頃から私が人の心を読める事はレオナ姉さんもよく知ってるでしょ」

「ええ、イヤという程ね……いくら秘密にしても、アンタは知ってしまつものね……」

「ええ、相手の事が何でも心を読む気がないのに、勝手に分かつてしまつのよね」

相変わらずの笑顔で悪気のない感じで語るのである。

「と、とにかく、アルには私から言つとくわ！そんな事より、仕事よ、仕事！」

カトレアから逃げるように厨房に走っていった。

「ウッフ、レオナ姉さんったら。

でもね、私はアルが欲しいのよ……もちろん、独り占めはしないわよね」

無意識にカトレアの優しい目は獲物を狙う目に変えて呟いた。

アルシオンと言う獲物を狩る貯めに。

レオナは厨房に戻り、通常通りコック達に的確な指示を出して、準備させ、それが完了すると開店時間まで待機させ、アルシオンが居

る店の外に向かった。

既に清掃作業を終えたルーシー達は開店時間まで休憩しようと寛ぎ始めた。

思ったより早く清掃が終わり、開店時間に余裕が十分あるので、女の子達は近くで腰を下ろして楽しいお喋りを始め、アルシオンは店の前にある一本の大きな木に寄り掛かった。

その場で立ったまま、目を閉じたアルシオンに一人の女の子が声を掛けた。

「あ、あのー！」

「ん？」

声を掛けられ、目を開けると、女の子は赤面して、彼にタオルを差し出した。

「もしよかったら、これを使って下さい……」

「ありがとう、使わせてもらっよ」

差し出されたタオルを笑顔で受け取り、首に掛けた。

特に汗などかいていないのだが、女の子からの好意なのでありがた

く受け取った。

女の子はアルシオンの笑顔にウツトリしてしまい、そのまま呆然としていると、後ろからルーシーを含め、清掃していた女の子達が一斉に、アルシオンにタオルを渡した女の子を非難した。

「アーツ！ズルーい！アルシオンお兄ちゃんにタオル渡すなんて！」

「ちよつとちよつと！何抜け駆けしてるのよ！」

「そつよそつよ！」

お喋りを楽しんでいた女の子達はその子に抗議したのだ。

ポケーツとしていた女の子は彼女らの声に我に返ると「ちよつとタオルを渡しただけじゃない！」と反論したら、それが切っ掛けで、女の子同士がケンカを始めた。

「おい！みんな、ケンカを止める」

アルシオンが女の子達のケンカを止め、ルーシーに抜け駆けとは何かと理由を聞こうとすると、「アル！」と大きな声でレオナが外に出てきた。

「レオナ姉さんが、どうした？」

「アル、ちよつと来「アル」…お母さん？」

レオナの後ろからマリリンが現れ、アルシオンを呼んだ。

「ん？マリンさんか？」

「アル、貴方に少し話があるから事務所に来なさい」

「ああ」

マリンに手招きされ、アルシオンは事務所に向かっていった。

「……………」

レオナもルーシー同様に母親が苦手らしく、黙ってアルシオンを見送った。

「もう、お母さんつたら！」

「でもレオナお姉ちゃん、お母さんにはルイズお婆ちゃん以外に誰も逆らえないよ」

「……………それ位、分かってるわよ。」

「ハア……………アルに話したい事があったのに……………」

「レオナお姉ちゃん、アルお兄ちゃんに何か用事があるの？」

「まあね、仕方ないわね、アルが連れていかれたからもう此処に用がないから、持ち場に戻るわね」

「あ……………うん」

レオナは厨房に戻っていった。

事務所にて、アルシオンはカトレアがマリんに密告したらしく、レオナとの事で色々と尋問されたが、アルシオンは平然とレオナとの関係をあっさりバラし、マリンを驚かせた。

「アル、本当にレオナと？」

「ああ、レオナ姉さんと一夜を過ごしたよ」

「……………」

あのヒステリックの塊だったレオナとそんな関係になるなんて…

早朝にレオナを仕事の事で事務所に来てもらった時に何か彼女の様子がおかしいと思ったのだ。

何時ものトゲのある雰囲気がなく、険しい表情から穏やかな表情に変わっていたので、さり気なく何かいい事があったのか聞いてみたら、赤面して、「な、何でもないわよ！」と慌てて否定し、仕事の話を終えると、足早に事務所を出ていったのだ。

レオナが居なくなると、マリンは鋭い洞察力で長女の変貌の原因は間違いなく男が出来た事だと判断し、知っている男性を頭で思い出そうとすると、カトレアが事務所に入ってきて、レオナがアルシオンとデキている事を伝え、彼を呼びに行き、連れてきて事情を聞いて今に至る。

「なるほどね…アル、よくあのレオナを落としたりわね」

「落とす気はなかったが、レオナ姉さんはいい女性だよ」

「ありがとう、アル。」

母親として娘を誉められて嬉しいわ。

でもね、アルに忠告したい事があるのよ

「忠告？」

「ええ、アル、カトレアに気を付けなさい。

貴方、狙われてるわよ」

「レオナ姉さんも同じ事を言ってたな、カトレア姉さんの何処に気を付ければいいんだ？」

母と姉が忠告する程のカトレアとは一体…

狙うカトレアとマリンの忠告（後書き）

今回はカトレアがアルシオンに迫ります！お淑やかそうに見えて、百戦錬磨（？）の強者の一面を持つ彼女にアルシオンはどう対応するのか！

次は『神の代行者の戦いと5000年前の歴史』を更新します。

カトリアの真の姿(前編)(前書き)

短いです。

カトリアの本性の一歩手前の前編です。

カトレアの真の姿（前編）

今日も『ゼロ』相変わらず大忙しである。

昼間の食堂もそうだが、夜は更にそれを上回る。

厨房は長女のレオナが、フロアは次女のカトレアが責任者として仕切り、末っ子のルーシーは給仕の女の子達を纏めながら、接客をしている。

アルシオンはオーナーのマリンからフロアで接客するように言われ、女の子達と酒とつまみを運んでいる。

アルシオンの仕事ぶりは本当に完璧である。

昨日の女の子達の仕事のやり方を一度見ただけで、直ぐに覚え、ミスをする事なく、テキパキとこなしているのだ。

客の出入りが激しくなっても、慌てる事もなく、冷静にと言つよりも、普通に対応出来ているところは流石である。

そんな中、仕事をしながら、アルシオンに熱い視線を送っている者が居た。

（アル……いい仕事ぶりだわ。

彼の接客する姿って本当にステキね……）

カトレアだった。

彼女は器用に接客しながらアルシオンを見つめていたのだ。

だが、その時、カウンター席に座っている酔っ払った男性客がカトレアに声を掛けた。

「オイ、その色っぽい姉ちゃん」

「あら、お客様、どうかなさいますか？」

ニコツと微笑み、対応すると、男はいやらしい笑みを浮かべるとカトレアの豊満な胸をいやらしい手つきで触った。

「あん、お客様、当店ではお触りはしておりませんわ」

『ゼロ』では給仕の女の子の身体に触れる事は当然、禁止されているのだが、カトレアは嫌な顔をせず、胸を触る手を払い除けようとせず、ニコニコ顔で優しく注意した。

「ヘッヘッヘッ、姉ちゃんいいオツパイしてるな。

どうだ？奢るから、一晚オレと付き合わねえか？」

いやらしい客は胸からお尻に手を伸ばし、カトレアを夜の相手に誘う。

「分かりましたわ、今からお部屋を取りますから、お仕事が終わりましたら、そこでお待ちしておりますわ。
それでよろしいでしょうか？」

「おっ！？いいのか？」

何とカトレアはOKしたのだ。

男はまさかカトレアがすんなりと自分の誘いを受けるとは思っていなかったようだ。

「ではお客様、お部屋ねカギを持って参りますので」

「お、おうー！」

カトレアは部屋のカギを取りにカウンター席から離れていった。

給仕の女の子達はカトレアと客のやりとりを見てヒソヒソ話を始めた。

「まただわ……」

「あのお客様、無事だといいけど……」

「そうね、カトレアさんとして無事だった男の人は居ないもんね……」

「うん……カトレアさんってば、優しいけど、ヤル事は相当エグイもんね……」

「うん、あの人は見かけによらず、ベッドに入ったら『猛獣』になるのよね……」

女の子達のカトレアの噂話をアルシオンは近くで接客しながら、さり気なく聞いていた。

（ほお、カトレア姉さんはそんな女なのか。

マリンさんとレオナがカトレア姉さんに気を付けると言ったのはそういう事だったのか）

カトレアの裏の顔を知り、気にせずに仕事を続行するのだった。

どうでもいいからである。

本日の営業が終了し、後片付けを済ませ、その場で解散すると、アルシオンはレオナに呼ばれ、事務所に連れていかれた。

どうやらマリンがレオナにアルシオンを呼ぶように言ったらしい。

事務所に入ると、そこにマリンがデスクワークをしており、二人がやってくると、手を止めた。

「アル、いきなり呼んでゴメンなさいね」

「別にいいよ、それよりオレに何の用があるんだ？」

マリンに用件を尋ねると、レオナが口を開いた。

「アル、貴方見たでしょ？カトレアがお客様に誘われて、それを受けたところを」

レオナは今日の事を知っていたようだ。

「ああ、見たよ。」

カトレア姉さん、今夜はそのお客さんと取った部屋で逢ったが、すると、マリリンが立ち上がる。

「ならアル、私達とその部屋に行きましょう。アルにカトレアの本当の姿を見せたいから」

マリリンとレオナはアルシオンをカトレアとそのお客が居る部屋に連れていった。

カトレアの本当の姿とは一体何なのだろうか？

カトレアの真の姿（前編）（後書き）

今回はカトレアとお客の睦みを隣の部屋で盗み聞きするアルシオンとマリオンとレオナは！？

カトレアの真の姿（後編）（前書き）

最近、エロい事ばかり書いてます…。

今のところ、それに対しての指摘を受けていないのでもう少しだけ
続けようかな？

カトレアの真の姿（後編）

マリンとレオナと共に、客を待つカトレアが取った部屋の隣の部屋に入ったアルシオンは自分を連れてきた母子にこれから何が始まるのか、理由を尋ねた。

「此処で何をする気だ？」

「アル、カトレアがお客様と部屋に入ったら、壁に耳を当てなさい。……直ぐに分かるわ」

「？」

マリンがそう答えると、次はレオナが答える。

「家族としてはあまりいいモノじゃないけど……此処でカトレアのもう一つの顔をアルに知って欲しいのよ……」

「……………」

カトレアは今から誘った男と何をするのだろうか？

深夜に男女が部屋で二人きりになればやる事は大抵アレだが…

三人が待機して、数十分程経つと、誰かが部屋に入ってきた。

マリんとレオナが壁に耳を当てると、入室したのは、カトレアらしい。

「お母さん、カトレアが入ってきたわ」

「ええ、相手の人と一緒に来てないみたいね」

「後で来るのかしら？」

「でしょうね……あら？お相手が来たみたいよ」

カトレアが部屋に到着して、直ぐに男が入室してきたようだ。

母子がアルシオンを手招きして、壁に耳を当てさせた。

三人は隣の様子に聞き耳を立てて確かめようとするのだった。

「お待ちしていましたわ、お客様」

「姉ちゃん、来たぜ！じゃあ、早速姉ちゃんを頂き……っっておお！
「！」

ドサッ！

「お客様、今夜は寝かせませんわよ」

「エツ?……姉ちゃん?」

「それに頂くのは私ですわ、今、私はとつても『飢えて』ますのよ。だから大人しく私に食べられて下さいね(笑)」

カチャカチャ…

「お、おい姉ちゃん!ちよつ、いきなり押し倒して、ズボン脱がすなんて……」

「まあ、ちよつと小さいけど、美味しそうね……まずは味見からね」
パクツ……ジユボボボ……!

「おおう!いきなりオレのを……あつ、ああああ……!」

壁越しに男はカトレアにナニされている音が聞こえ、マリンとレオナは聞き耳を立てながらため息をついた。

「下準備が始まったわね……」

「ええ、でもこれはまだ序の口よ、レオナ」

「そうね、カトレアに天国から地獄に突き落とされるわ……可哀想に……」

二人が男を哀れむような事を呟きながら、聞き耳を立てている。

普通、自分の娘と妹を心配するのだが、逆に男を心配しているのだ。

「レオナ、カトレアが本番に入ったわよ！」

「……………やってるわね」

「お客様はカトレア相手に何処まで持つかしら？」

「あの子はどんな相手でも最低五回はスルから……………あのお客様は……………
……………多分無理っぽいわ」

「私もそう思うわ。」

あのお客様はあまり精力が強そうに見えないから、持って三回が限界でしょうね」

アルシオンはそんな二人の会話の内容を呆れ顔で聞きながら、聞き耳を立てている。

（前々から思っていたが、この親子は相当変わってるな。

自分の娘と妹の淫行を盗み聞きするなんて、普通しないだろう）

そう思いつつ、再び盗み聞きを始めた。

「オウオウオウ……」

「如何？気持ちイイですか？」

「イ、イイ！！スゴクイイよ…… オウ……ウオウオウオウ……」

「それはよかったですわ、それじゃ続きを楽しみましょう。」

「オホオ……ッ！！最っ高……」

ギシギシギシギシギシギシギシ！

行為でベッドから軋む音が鳴り、男は快楽に身を任せている。

だがそれは最初だけだった。

「オウオウオウオウオウオウ……」

……フウフウフウ……「」

男の声が悦びから徐々に苦痛に変わり始めてきた。

「ハアハアハアハアハア…… ウッウッ

ウッウッウッ……」

「ア……ン もっと、もっと頂戴……！」

ギシギシギシギシギシギシギシ！

カトレアの腰使いが激しくなると同時に、ベッドが軋む音も大きくなった。

「ウツウツ!……もう止めて……これ以上はもう!……」

「ダメ、私は全然満足してないの!もつと頑張ってるね(笑)」

「無理だ……よ……もう……三回も連続で……ヤッてるのに……」

男は苦しそうにカトリアに止めてもらおうように言った。

「まだ三回でしょ?あと二回……いえ、三回はシテね」

「そ、そんな……ア、アンタは化けモンか!？」

「あら?女性に対してそんな事を言うなんてイケない人ね 罰として、あと6回しましょうね(笑)」

「なっ!!倍かよ!？」

「さあ、おしゃべりはここで終わりにして、後7回シテね(ハート)

「増えてるじゃねえか!？」

「そっ?じゃあ8回ね(笑)」

「あ、悪魔……」

「あら?またそんな事を言うのね?じゃあ10回ね(ハート)」

「た、助けて……誰か助けてくれ……!!」

ギシギシギシギシギシギシギシギシギシギシ！

前にも増して腰使いが激しくなり、男の顔色が益々悪くなってきた。

「ヒィ〜〜〜〜！！もうダメだー！！し、死ぬー！！！！」

悲鳴を上げたが、カトレアは無視し、男を貪り続ける。

このままだと、男は腹上死してしまうが、それでもカトレアは男の様子など全く気にもせず腰を振り続けた。

男の悲鳴が少しずつ小さくなり、そして、消えていった。

「レオナ、行くわよ！」

「ええ、アル、カトレアの部屋に乗り込むわよ！」

二人は立ち上がり、アルシオンを連れて、部屋を飛び出した。

マリンはマスターキーを取り出して、カトレアの部屋のカギを解錠し、アルシオンとレオナと一緒に部屋に殴り込むかのように入った。

「カトレア、もう止めなさい！」

「あら、お母さん、レオナ姉さん、『また』私の邪魔をしに来たの

「？」

ベッドの上で泡を吹いて白目になっている男を仰向けにして乗り掛かっている素っ裸のカトレアは男女の睦みの邪魔をした母と姉に笑顔で抗議すると、二人の隣に居るアルシオンを見て嬉しそうな表情になった。

「アル、来てくれたのね？」

男から離れ、彼女らに目もくねずにアルシオンに抱き付いた。

「ねえ、アル。」

「今から私と……」

「しないよ」

アルシオンは拒否し、求めるカトレアの鳩尾に一発を食らわせ、意識を刈り取った。

アルシオンは一撃で沈んだカトレアを抱え、イスに座らせると、男の様子を見た。

無様としか言いようが無い哀れな姿である。

幸い、死んではないようだ。

泡を吹いているが、気を失っているだけのようだ。

「可哀想だけど、この人は男としてもう終わりね……」

「……………」

マリンとレオナは男のボロボロ(?) になった下半身を見て、哀れんだ。

マリンが言う男として終わりとはどういう意味なのだろうか？

「これがカトレア姉さんの本当の顔か……………」

イスで気絶しながら気持ちよさそうに眠っている真っ裸のカトレアを見てそう呟くのだった。

カトレアの真の姿（後編）（後書き）

次回はカトレアの救済（？）に入ります。

彼女の生まれつきの天然淫乱体質を改善しようとアルシオンが頑張ります。

次は『神の代行者の戦いと5000年前の歴史』を更新します。

カトレアと…そしてレオナと…（前書き）

かなり遅くなりました。

R指定の話は取り敢えずここで終わりにします。

カトレアと…そしてレオナと…

今日も何事もなく、仕事が終わりに、後片付けも済ませ、一日が終了した。

アルシオンは家族や従業員達に「お疲れ」と挨拶して、自室に戻ろうとすると、長女で恋人のレオナが彼を引き止めた。

「アル、今夜も部屋に行っていいかしら？それとも私の部屋に来てくれない？」

「悪い、レオナ。

今夜はちょっと用があるから、明日お前の部屋に行くよ」

「そうなの？じゃ明日、部屋で待ってるから、絶対に来てね」

「分かってるよ。

必ず行くから」

「ええ、約束よ」

レオナはアルシオンに軽くキスして、手を振って、部屋に戻っていた。

以前の彼女とはとても思えない光景である。

レオナは仕事が終わると、毎日とはいかないが、週に三、四回程、アルシオンと部屋で朝まで過ごしているのだ。

それを繰り返していく内に、レオナの心境が徐々に変化し、プライドの高い高圧的な女性から優しい女性に変貌し、自然に二人は恋人同士となり、家族や従業員達に付き合っている事を告白し、皆を驚かせたのである。

彼らは、アルシオンがあレオナと付き合っている事にビックリしたが、あーだこーだと騒いだのだが、最終的に二人の仲を認めたのである。

マリンだけはアルシオンから聞いて知っていたが、彼と娘がそんな関係になったと聞いた時は、顔には出さなかったが内心、驚愕したのだ。

だが、一つ問題があったのだ。

末っ子のルーシーである。

彼女もアルシオンの事が好きだったので、姉が想い人と恋人になつたと聞くと、凄く悲しみ、その場で勢い良く嘆いたのである。

失恋し、泣き続けるルーシーをマリンとカトレアが慰め、何とか気持ちが悪く落ち着いた彼女は今だにアルシオンを諦められない気持ちを心の奥底に無理に押し込め、二人を「おめでとう、アルお兄ちゃん、レオナお姉ちゃん」と笑顔で祝福したのである。

自分の気持ちを必死で押えながら…

アルシオンが自室に入ると、次女のカトレアがネグリジェ姿でベッドに座っていた。

「アル、お帰り 今日もお仕事お疲れ様」

「ああ、カトレア姉さんもお疲れ。それで、オレに何の用だ？」

「ウッフ……分かってるクセに」

「レオナが知ったら怒るぞ？」

「構わないわ。」

別にレオナ姉さんは怖くないわよ」

「あのさ、昼間、姉さんが今夜オレに話があるって言うから、レオナとの時間を割いたんだぜ。早く用件を言ってくれ」

「ええ、それはね……」

カトレアはベッドから立ち上がり、ゆっくりとアルシオンに近づいていく。

昼間、店の奥にある従業員用の休憩室でアルシオンが休憩していると、カトレアも休憩にやってきた。

「アルに大事なお話があるから、今夜、貴方のお部屋で待っているわね」

と強引かつ勝手にアルシオンの意志を無視して、有無を言わず、約束を取り付け、それだけ言うと、休憩しに来た筈のカトレアはそのまま、休憩室を出ていき、仕事に取り掛かったのである。

彼は偶然にもレオナと今夜逢う約束していなかったもので、拒否はしなかったが、例えカトレアの誘いを断ったとしても、彼女は見かけによらず執念深いので、YESと言うまで、しつこく付きまとってくるだろう。

アルシオンは基本的に自分の時間があれば、誰からの誘いを受けるタイプであり、なければNOと言って躊躇いなくキツパリと断るタイプである。

断られた相手がしつこい場合は状況によっては力づくでお引き取り願うので、カトレアも例外ではない。

妖しい笑みを浮かべたカトレアがアルシオンに抱きつき、自分から口付けし、激しいキスをしながら、女性とは思えない力でベッドに連れていき、押し倒した。

腕は細いが、意外と腕力のあるカトレアに押し倒され、アルシオンはため息をつく。

「カトレア姉さん、話を頼むよ」

「ええ、たっぷりとお話しましょうね。
言葉じゃなく、お互いの身体で……ね」

普段の慈愛に満ちた彼女はベッドで『肉食獣』に変わり、アルシオンと言う『獲物』を食らうのだった。

カトレアの豊満な肉体がベッドでグッタリして俯せになったまま「ハア、ハア……」と激しく息切れをし、身体中が汗まみれになっていた。

余程激しい情事をしたのだろうが、カトレアとは対照的にアルシオンは彼女の横で半身を起こして、全くビクともしていないのか、平気な顔でピンピンしている。

「アル……貴方ってスゴいわ……こんな私…初めてだわ……」

ウツトリした表情で言うのだが、身体に力が入らないのだろうか、なかなか起き上がれない。

特に情事で腰を抜かしているので、主にそれが効いているのだろう。

「カトレア姉さんもスゴかったよ。」

レオナよりも……いや、並の女性よりも桁外れていたよ」

アルシオンもカトレアのずば抜けた肉体に驚いていた。

カトレアの身体は並の男では彼女を満足させられない程だったのだ。暫くすると、カトレアの身体に体力が戻り、今までの淫らな彼女から普段の優しい彼女に戻り、自分の事を話し始めた。

カトレアは表面的に心優しく、頭脳明晰で運動神経も抜群で、何をやらせても完璧にこなす程の優秀な女性だが、実は生まれつきの淫乱体質の持ち主だった。

きっかけは不明だが、十歳でその体質が目覚め、その歳で男性を覚え、その時から幾多の男性と関係を持ち続けていたのだ。

しかも、カトレアの性技と精力は男性と交わる事で益々上達し、強くなり、普通のセックスでは満足出来なくなり、性交中に大抵の男性を再起不能とその寸前まで追い込み、色んな意味で彼らの人生を変えてしまったのだ。

そして、何時なのかは覚えていないのだが、それを繰り返していく内に、自分の中に一つの人格が生まれたのだ。

それはカトレアの淫乱女性の人格だったのだ。

彼女の豊満なスタイルをイヤらしい目つきで見る男性の視線に反応

して、その人格が現れ、その場の状況によって相手を誘ったり誘われたりして、ベッドに誘い込んで、その相手の精力が尽きるまで交わるのである。

しかも本人に悪気が全くなく、自覚もないので、ある意味質が悪い。

「生まれ持った体質か……」

「……………」

「眠ったのか、カトレア姉さん」

「スウ……スウ……」

話し終えたカトレアは何時の間にか、力尽きたかのように可愛い寝息を立てて眠ってしまった。

満ち足りた表情で、しかも幸せ一杯と言った感じで。

アルシオンはそんなカトレアに布団をそっと掛けてやり、部屋を出ると、目前で廊下に座り込んだレオナが涙目でアルシオンをキッと睨み付けた。

「アル……カトレアと何してたのよ……?」

涙声で怒りを込めてカトレアとの事を聞く。

「立ち聞きしてたから分かるだろ？」

「!?!?.....私が居るのに平然と言わないでよ!!！」

「ダメか？」

「当たり前でしょ!?!?私以外の女の人とあんな事しないでよ!!！」

「そうか、ならオレ達は別れようか？」

「えっ!?!?」

アルシオンが別れ話を出すとレオナが驚く。

「ど、どうして.....?」

「オレは「アル、そんな事言っちゃダメよ」∴カトレア姉さん、起きたのか？」

ネグリジエを着たカトレアが部屋から出てきた。

別れ話に戸惑うレオナをカトレアが優しく抱き締めた。

「レオナ姉さん、心配しないで。

アルは姉さんを捨てたりなんかしないわ。

アルは姉さんを愛してるわよ、そうでしょう?アル」

「ああ、レオナを愛している。

だが.....」

「待つて、アル」

「ん？」

アルシオンの言葉をカトレアが途中で遮ると、レオナに話し掛ける。

「レオナ姉さんはアルの事を愛しているの？」

「……ええ、私はアルを愛しているわ」

「なら縛っちゃダメよ。」

アルは束縛される事が嫌いなのよ。

でも愛してほしい時は愛してくれるし、そばに居てほしい時はそばに居てくれる人なの。

姉さんに……そして私に幸せを与えてくれたこの人を嫉妬なんかで縛ってはいけないのよ」

「で、でも……」

「確かにすぐに受け入れられないでしょうけど、私はアルに愛してほしい、そばに居てほしいの。」

好きなのよ……アルの事が……」

「カ、カトレア!？」

「でも私はアルを縛ったりしないわ。」

アルが姉さんや他の人とどんな関係になっても構わないわ。

アルはアルのしたいようにしたらいいんだから」

「……………」

カトレアの告白にレオナは呆然とした。

アルシオンも姉妹を静観するかのよう沈黙している。

カトレアの言葉通り、彼は縛られる事を嫌い、いくら愛するレオナでも自分を独占するのなら、彼女との関係を解消するつもりだったのだ。

束縛はイヤだが、自分も相手を束縛する気はないので、例えレオナが他の男性と関係を持ったとしても、責めはしないし、気にしないのだ。

「レオナ姉さん、私達は同じ人を好きになつた者同士なんだから、深く考えないでね。」

それに、こんなステキな人を独り占めなんて許さないわよ。」

「……………」

「ね？レオナ姉さん」

「少し……………考えさせて……………」

「分かったわ。」

「じゃアル、今から私ともう一度愛し合いましょ。」

「なっ……………!!ど、どうしてそうなるのよ!?!?」

「だって姉さんは今から考え事をするんでしょ?その間に私達は今も」

つと仲を深めちゃおうかなーってね アル、ベッドでまた私を激しく抱いて」

「な、な……………」

カトレアがアルシオンの右腕を組んで、部屋に入ろうとすると、レオナが空いている左腕に慌ててしがみついた。

「ま、待ちなさい！カトレア、貴女だけおいしい思いはさせないわよ！」

「なら二人でアルに可愛がってもらいましょ」

「う、う……！」

三人はアルシオンの部屋で、濃厚な情事を始めたのだった。

後に独占欲の強かったレオナはカトレアにもうアルシオンを束縛しないと宣言し、長女と次女はアルシオンの恋人になった。

その後、アルシオンを諦められなかったルーシーが三人の関係を知ると、彼女もどさくさに紛れて、彼と関係を持ち、恋人になり、アルシオンは三姉妹を恋人にしたのだった。

当然、それが三姉妹の母のマリンの耳に入り、彼らの関係に猛反対したが、ルイズが「いいんじゃないかしら？この娘達を幸せにしてくれるなら、私は言う事はないわ」と彼らの関係を認め、今だに反対するマリンはルイズの説得に渋々了承し、四人の仲が公認したのである。

その場に居なかった三姉妹の父であるサムエルは、マリンから後で彼らの事を聞かされ、立ったまま気絶したのだった。

カトレアと…そしてレオナと…（後書き）

次はお婆ちゃんになったシエスタを登場させようと思います。

ルイズのところに遊びに来たシエスタと昔話する話を執筆する予定です。

ルイズの親友シエスタの来訪（前書き）

今回は短めです。

ルイズの出番がなかなかなかったので、これからどんどん出します。

ルイズの親友シエスタの来訪

アルシオンがルイズに召喚（？）されて八ヶ月経過した。

アルシオンがイスに座って、部屋で寛いでいると、ドアがノックされ、ドアが開かれ、レオナが入ってきた。

「『あなた』、そろそろお昼よ。

みんな待っているわよ」

レオナがアルシオンを『あなた』と呼んでいる。

「もうそんな時間か？分かった、直ぐに行くよ」

イスから立ち上がり、レオナと一緒に部屋を出ていった。

二人は半年前に結婚し、夫婦となった。

彼らが夫婦になっても、カトレアとルーシーとの関係は現在も変わっていない。

最初は三人を妻にと言う話だったが、世間体を考えたマリリンに却下された。

幾ら三姉妹がいいと言っても、一夫多妻などんでもないのだ。

もう昔の王族や貴族じゃあるまいし、何を言ってるんだ！と大反対され、あれやこれやと家族…と言っても、主にマリんと揉めたり、話し合った結果、長女のレオナがアルシオンの妻に決定したのだ。

妻になれなかったカトレアとルーシーは内心、残念に思ったが、二人はアルシオン以外の男性と付き合う気がなく、考えられないので、今後も関係を続けていく事となった。

つまり、二人はアルシオンと不倫関係になり、妻レオナ公認の愛人である。

もちろん、マリんとサムエルはそんな事を認められず、反対するのだが、カトレアが「認めてくれないなら、今から四人で駆け落ちするから、どうぞご勝手に」と笑顔で脅し、それを実行しようとする、両親は慌てて彼らを引き止め、仕方なく彼らの関係を認めたのである。

両親はカトレアが有言実行の塊である事をイヤという程、理解している、世間にバレないようにする事を条件に、四人の関係を認めただのである。

今日から一週間、『ゼロ』の改築の為、休業する事になり、家族及び従業員は休暇中である。

最近、お店の壁や床が傷みだし、時折そのひび割れが少し目立ち、

床を通るだけでギシギシと音がするので、マリンがお店を改築する事を決めたのだ。

そして現在、大工の連中が『ゼロ』の改築を始めているのである。

昼食を終え、後片付けをしていると、一人の従業員の女の子がダイニングルームにやってきた。

「ルイズお婆ちゃん、お客様が来たよ」

「あら、それなら客間にご案内してちょうだい」

「うん」

女の子は頷いてダイニングルームを出ていった。

ルイズは孫娘だけじゃなく、彼女みたいな若い子に「お婆ちゃん」と呼ばせている。

もう経営者ではなく、隠居したので、自分を祖母のように接してほしいと従業員に、特に女の子達に頼んだのだ。

女の子達の中には家族を失った娘が多く、ルイズはそんな娘達を不憫に思い、自分をお婆ちゃんと思って甘えなさいと言ったのである。

女の子達はそんなルイズの優しさに触れ、彼女を祖母として、慕う

ようになったのである。

ルイズが客間に入ると、そこに白髪の老女が座っていた。

「シエスタ、シエスタじゃないの！久しぶりね！」

少し声をあげて、シエスタと呼ばれた老女に嬉しそうに抱きついた。

「ルイズ、お久しぶりね……元気そうで何よりだわ」

二人は暫くの間、抱き合うのだった。

二人はルイズの部屋に移動し、お茶を飲んでいる。

「ルイズ、明日が何の日か知ってるかしら？」

「ジェシカの命日でしょう？去年の暮れはスカロンさんの命日だったものね」

スカロンとはシエスタの叔父でジェシカはその娘で従姉妹である。

その親子は『魅惑の妖精』亭と言う居酒屋の店主と看板娘で、当時、

少女時代のルイズと復讐に狂った平民達から奇跡的に救出した姉のカトレアを魔法が消滅して、貴族への恨みが爆発し、暴動を引き起こした平民達に殺されないよう、シエスタとお店で匿い、マリン出産の手助けと世話をしてくれ、その後、亡くなったカトレアの墓を建ててくれ、『ゼロ』の開店の援助をしてくれた大恩人なのだ。

シエスタはかつてトリステイン魔法学院で働いていたメイドだったが、ルイズとは最初は貴族と平民と言う間柄だったが、ルイズに召喚された一人の少年の存在と影響により、二人の関係が徐々に変化した。

やがて、少年が戦争で帰らぬ人となり、ルイズは彼の子を身籠り、原因不明の魔法消滅で暴徒化した平民に貴族と言う理由で追われ、殺されそうになったが、シエスタが助けてくれ、そして、シエスタの家族が密かに救い出した次姉のカトレアを『魅惑の妖精』亭に匿ったのだ。

あの日から60年経った話の一部をルイズとシエスタは目を閉じながら、ゆっくりと語り合った。

「シエスタ、明日、ジェシカのお墓参りに行きましょう」

「ええ、じゃないと、ジェシカが怒っちゃうわ」

「フフ、そうね」

シエスタは今日はルイズ達の家泊まる事になり、明日のジェシカの墓参りに備え、ルイズの部屋で早めに休んだのだった。

ルイズの親友シエスタの来訪（後書き）

今回の内容は未定ですが、今年中にラストが出来上がりそうです…
といっても案外早いかも。

次は『神の代行者の戦いと5000年前の歴史』を更新します。

墓参りとシエスタとの語らい(前書き)

今回も短めです。

よかったら見て下さいね

墓参りとシエスタとの語り

ルイズ達家族とシエスタの家族は現在、タルブと言う村のとある墓地に居た。

今朝早く起きて、ルイズ達はシエスタとその家族と『ゼロ』で合流し、大きめな馬車二台でタルブに向かったのである。

一台目の馬車には祖母のルイズ、その娘のマリンとその夫のサムエル。

そして家族になったアルシオンとその妻で長女のレオナと次女のカトリアと五女のルーシーの計7人が乗車している。

三女と四女は用事があって墓参りに来れないと連絡があり、参加していない。

もう一台はシエスタとその息子のサイアとその四人の息子と一人の孫（シエスタのひい孫）のルイズ達と同じ計7人が乗車している。

後で聞いた話だが、シエスタの息子であるサイアは何とルイズの夫だった亡きサイトの息子だという。

つまり、マリンとサイアは異母姉弟なのである。

彼らに乗せた二台の馬車は何事もなく、タルブに到着し、墓地に向かうのだった。

彼らは二つの墓に一人一人が花を手向け、手を合わせ、冥福を祈った。

左側にある墓はスカロンと言う人物の墓で、右側にある墓はその娘であるジェシカの墓である。

「スカロンさん、ジェシカ……」

「スカロン叔父さん、ジェシカ……」

ルイズとシエスタは墓前に膝をついて、二人の墓に祈りを捧げたのだった。

アルシオン達家族はそんな二人を黙って見守り続けるのだった。

「二人とも、また来るわね」

「来年も必ず来るわ……」

ルイズとシエスタは墓参りを終えると、家族を連れて、スカロンとジェシカの墓を後にした。

シエスタの実家に一泊する事になり、彼らは夕食を楽しみ、夜が更けると、それぞれの家族は就寝した。

アルシオンはレオナ達が眠った事を確認すると、与えられた部屋を音を立てずに抜け出し、外に出た。

夜空を見上げる事はアルシオンの日課のようなもので、彼は綺麗に瞬く無数の星を眺めていると、アルシオンの後ろから、誰かが現れた。

「今晚は、アルシオンさん…だったかしら？」

「シエスタさん、今晚は。」

「シエスタさんも散歩ですか？」

「シエスタだった。」

今まで挨拶程度で顔を合わせただけだったのだが、こうやって直接面と向かって話すのは初めてである。

シエスタはアルシオンに気付いていたが、ルイズとの会話に夢中で、失礼だが、アルシオンの存在を忘れていたのである。

「少し、一緒に歩きますか？」

「はい」

シエスタの誘いを受け、二人で散策した。

歩いていくと、大きな池があり、ベンチがあったので、二人はそこに腰を降ろした。

「アルシオンさん、ルイズから聞きましたよ。
貴方はレオナと結婚したんですってね」

「ええ」

「それから、カトレアとルーシーとも続いているとか……」

「その通りです。」

ボクは三人を愛していますから」

迷いなく答えた。

そんなアルシオンを見て、シエスタは微笑んだ。

「貴方は、あの人に何処か似ているわね……」

「あの人？それはサイトさんの事ですか？」

シエスタはゆっくりと頷いた。

「ええ、ルイズの旦那様で、私の愛した人です」

「……………」

シエスタは当時の事を話した。

サイトとルイズは恋人同士だったが、シエスタはサイトの事が諦められず、あのアルビオン戦前にルイズに黙ってサイトを誘い、抱いてもらったそうだ。

その後、サイトはアルビオンの7万の大軍にたった一人で突っ込み、帰らぬ人となったという。

この話は以前、ルイズから聞いて知っていたが、彼は黙って聞いた。

サイトが亡くなって、暫くすると、何の前触れもなく突然、魔法が消滅し、それを知った貴族に対して恨みを持った多くの平民達が暴徒化し、組織を立ち上げ、ハルケギニア中の貴族を大量虐殺したのだ。

そんな中、ルイズとシエスタに新しい生命が宿っており、暴徒化した平民達から守るために匿ってくれたスカロンとジェシカ親子の営んでいた『魅惑の妖精』亭でルイズがマリンを、シエスタがサイアを産んだのだ。

その後、ルイズはマリンの為にか素性を隠し、そのお店で働きながら、マリンを育て、暴動が治まった後にスカロンの援助で宿屋『ゼロ』を開店し、独立したのだ。

シエスタは元々平民なので、危害が及ぶ事はなく、平民の内乱で迂闊に表に出られなかったルイズを鎮静化するまで支援し、時の流れ

と共に、二人は主従を越え、友達から大親友となった。

「二人ともよく、頑張りましたね」

「そんな事はないわ、でも私は…いえ、私達は誓ったのよ。
サイトさんの分まで生きようって…」

「……………」

二人のその誓いが生きる原動力なのかもしれない。

「そして、二十年前にスカロン叔父さんが亡くなり、五年前にジェシカも亡くなってしまったわ…結局、ジェシカは子供を残す事無く逝ったのよ……………」

「……………」

アルシオンはその親子が営んでいた『魅惑の妖精』亭はどうなったのか、尋ねてみると、ジェシカの遺言で、店を畳み、その全てをルイズとシエスタに分配したのだ。

勿論、『魅惑の妖精』亭で働いていた従業員を二人が別々に経営しているお店で引き取ったそうだ。

今更だが、シエスタも『シエサイ』と言う宿屋をトリスタニアで経営しているが、今はルイズと同じように、高齢を理由に経営から退

き、息子のサイアがお店を継いだのだ。

「そろそろ戻りましょうか？少し寒くなってきたから」

「ええ、シエスタさん、帰りましょう」

二人はベンチから立ち上がり、シエスタの実家に戻っていった。

墓参りとシエスタとの語らい（後書き）

今回は60年前の出来事を書くことかなと思います。

ひよっとしたら、執筆状況で違う話になるかもしれませんが、その時はご容赦を。

60年前の事件（前書き）

今回は過去の話で短いですが、書いてて、少し心苦しい気持ちになりました。

善良な貴族の方々に心からお詫びします。

60年前の事件

今から60年前。

ルイズとシエスタがまだ少女だった頃、ハルケギニアではとある戦乱が起きていた。

「ルイズを頼む！」

当時少年だったサイトは愛する主である少女ルイズを薬で眠らせ、神官らしき少年に彼女を託した後、アルビオン軍に向かっていった。

その後、アルビオンの大軍の足止めを成し遂げたサイトは帰らぬ人となった。

意識を取り戻したルイズはサイトを失った事を深く嘆き、仲間達と本国に戻ったが、愛するサイトを失ったショックからか、気を失った状態で生活していたが、ある日、ルイズは無意識に学院の屋上に足を運んでいた。

彼女の目に意志が宿っておらず、足が勝手に前に進んでいる。

「サイト……今から…私もあなたの傍に…行くからね……」

そして、飛び降りようとした瞬間、誰かがルイズの背中にしがみつき、飛び降り自殺を阻止した。

「ミス・ヴァリエール！何してるんですか！？」

「シエスタ？」

止めたのは、当時メイドだったシエスタだった。

だが、そんなシエスタを振りほどき、再び飛び降り自殺をしようとする、シエスタもまたルイズを押しえた。

「シエスタ、放して！」

「放しません、早まらないで下さい！」

「お願いだから、死なせて！サイトの所に行かせて！」

「ダメです！死んじゃダメ！」

シエスタの制止の声が聞こえていないのか、ルイズはシエスタから振り切ろうと暴れている。

そんなルイズの頬にシエスタがパン！と思い切り平手打ちした。

「えっ………？」

シエスタにぶたれて、正気に戻ったらしいルイズは叩かれた頬を手に当てて呆然とした。

シエスタの目から涙が零れた。

「こんな事して……こんな事をすればサイトさんが喜ぶと思ってるんですか………？」

涙声で叫びながら、ルイズを睨み付けた。

「……………」

シエスタの言葉にただ黙るしかなかった。

「サイトさんはミス・ヴァリエールに生きてほしいから……………大好きな貴女に死んでほしくないから、命懸けでアルビオン軍に向かっていったんじゃないんですか？」

「……………」

「それなのに貴女は、サイトさんの想いを知らずに死のうだなんて……………そんなの私が絶対に許しません！」

「……………」

「ミス・ヴァリエール、生きましょう。サイトさんの為に、ミスに生きてもらいたいと願ったサイトさんの分まで……………ね？」

「……………うっ……………うっ……………！」

シエスタはルイズを抱き締めた。

そして、ルイズはシエスタの胸で思い切り泣いたのだった。

シエスタによって、普段の自分を取り戻したルイズはサイトの分まで生きようと決心した。

（サイト、私はあんたの分まで生きるわ！何があっても、最後まで諦めないで生き抜いてみせるからね。

だからサイト……私を見守っていてね……）

ルイズは亡き愛しい使い魔の少年に心からそう誓うのだった。

だが、ルイズの誓いを嘲笑うかのように、ハルケギニアを『絶望』が包み込もうとしていた。

それはアルビオンとトリステイン・ゲルマニア連合軍の戦争が終わり、同時に降臨祭が終わった直後、事件が起きようとしていた。

夜、トリステインの首都トリスタニアのちょうど真ん中辺りで、平民の若い女性が一人の貴族に絡まれていた。

「貴様、平民の分際で、この私にぶつかるとは！」

「ヒツ、ほ、本当に申し訳ありません！」

女性が必死で助けを乞うが貴族は嫌らしい笑みを浮かべた。

「そうか、まあ許してやらん事はないが……この私に身体で奉仕するなら、ぶつかった事を帳消しにしてやるわ」

「そ、そんな……私には夫と子供が……」

「そんな事は私には関係ない。
それで、どうする？やるかやらないか早く選べ！」

「あ……あ……」

絶望した女性は涙を流した。

どちらを選んでも自分の人生が今、終わったのだと悟ったのだ。

辱められるか、殺されるか、追い詰められた彼女は何も考えられなくなってしまうた。

ただ涙を流す事しか出来ない。

何時までも返事しない彼女にイラついた貴族は懐から杖を出して、女性に向ける。

「もうよい、この私を不快にさせたのだから、死んで私に詫びるがいい！」

詠唱し、魔法を放とうとしたが、杖から魔法が放たれなかった。

「？」

貴族はもう一度、詠唱したが杖から魔法が放たれない。

「な、何！？」

魔法が使えない事に焦った貴族は慌て、何度も詠唱しても結局、魔法が放たれる事はなかった。

「そ、そんなバカな……魔法が使えないとは……」

ショックで茫然自失した貴族を見た女性は立ち上がり、逃げるようにその場を離れていった。

この日から貴族及びメイジの『絶望』がハルケギニアを覆い始めるのだった。

ハルケギニア全土の貴族達は『あの日』から魔法が完全に使用出来なくなった事で大パニックに陥ってしまった。

とうとう、それが平民達に伝わり、貴族に虐げられた怒りと恨みを爆発させ、無力化した貴族達を襲撃し始めた。

最初は悪質な貴族のみを襲撃していたが、平民達は益々エスカレートしていき、暴徒化し、組織を立ち上げ、善悪に関係なく貴族だけと言う理由で虐殺を始めた。

貴族への憎悪に支配された彼らは悪魔に取りつかれたかのように、貴族やメイジを次々と皆殺しにされ、彼らの魔の手がルイズ達が居るトリステイン魔法学院に迫ろうとしていた。

60年前の事件（後書き）

今回はルイズがシエスタと共に暴徒化した平民達から逃れる話に入ります。

学院の使用人、職員、生徒達の運命は！？

次は『神の代行者の戦いと5000年前の歴史』を更新します。

逃げるルイズとシエスタ、そしてギーシュとの悲しい別れ（前書き）

どうやら今年中に完結出来そうにないですが、出来るだけ頑張ってみます。

逃げるルイズとシエスタ、そしてギーシュとの悲しい別れ

トリステイン魔法学院は混乱していた。

魔法のみならず、生徒達の使い魔が次々と消え、全て残らず消えていったのだ。

生徒達がパニックに陥っている中、何人かの教職員達が学院長室のドアをノックしたが、返事がない。

「オールド・オスマン、失礼しま……なっ!？」

状況が状況なので、失礼を承知でドアを開け、入室すると、床に白骨化した遺体が横たわっていた。

死体が着ている服装はオスマンが普段、着ていたモノと同じなので、オスマンだろうか？

教職員達はオスマンらしき死体を見て呆然とするのだった。

「ミス・ヴァリエール！」

ルイズの部屋にシエスタが飛び込んできた。

「シエスタ、どうしたの？」

この非常時に普段と変わらない態度でシエスタを迎えたが、シエスタは慌ててルイズに駆け寄る。

「……何で平然としてるんですか？魔法が消えて、生徒の皆さんが慌てているのに」

「確かに最初は驚いたわ。

でも不思議と落ち着いていられるのよ。

魔法が使えなくなったと言っのに……変よね」

「……………」

ヤレヤレと言った笑みをシエスタに向けた。

「と、とにかく逃げましょう！もうすぐ『反乱軍』がこっちに攻めてくるそうですから今のうちに！」

シエスタが言う『反乱軍』とは、貴族が魔法を使えなくなった事を知った平民達が彼らを肅清する為に結成された組織で、ハルケギニア各国で次々と反乱軍が蜂起しているそうだ。

「シエスタ、ダメよ。

アンタが私を助けたら、いくら平民のシエスタでもタダじゃ済まないのよ！

私は大丈夫、だから……」

「何かいい方法があるんですか？」

「こ、これから考えるのよ！」

「……ないんですね？」

「ウツ……」

ジト目のシエスタにルイズがどもる。

「なら行きましょ、ミス？」

「……ハイ」

シエスタの迫力のある物凄い笑顔に威圧されたルイズは支度して部屋を出ていった。

「ルイズ！」

ルイズの同級生らしき少年が叫ぶように二人を呼び止めた。

「ギーシュ、どうしたの？」

ギーシュと呼ばれた少年は彼女らに慌てるように口を開く。

「ルイズ、モンモランシーを見なかったかい！？」

「ううん、見てないけど？モンモランシーがどうかしたの？」

「今朝から見当たらないんだ！今彼女を探しているんだが……」

モンモランシーとはルイズの同級生でギーシュと付き合っているのだが、今朝から姿を見ていないらしい。

「ルイズ、シエスタ、反乱軍がもう近くまで来ているらしいから君達は早く逃げるんだ！」

「待ってください、ミスタ・グラモンはどうするんですか？」

「そうよ、ギーシュも私達と一緒に逃げましょうー！」

するとギーシュは真剣な眼差しで言う。

「モンモランシーを置いて逃げる事は僕には出来ないよ。逃げるのは彼女と一緒に。」

もういいだろ？さあ行きたまえ」

「……………」

「二人とも行くんだ！」

普段はギーシュはキザなのだが、今の彼の言葉には覚悟がこもっているようだった。

まるで何かを悟ったかのように。

二人はギーシュに背を向け、歩みだし、振り返ろうとすると「振り返くな！」と彼は怒鳴った。

「ギーシュ……また、会おうね……」

「ミスタ・グラモン……また……会える日を……」

「ああ……その時はモンモランシーと一緒に会おう……」

ルイズとシエスタは涙声でギーシュに別れを告げ、彼も二人に別れを告げた。

三人は分かっていたのだ。

もう再会する事がないと。

彼女らが学院を無事に脱出し、暫くすると反乱軍が学院を襲撃した。

パニックで逃げられなかった教職員と生徒達の殆どは憎悪に支配された民兵に虐殺され、辛うじて逃れられた者も待ち伏せなどで発見され、斬殺され、結局は学院のメイジ及び貴族はルイズと平民の用人以外は一人残らず殺されてしまった。

殺された中にギーシュも居り、彼の横に同じ金髪の少女が居て、彼女も殺され、二人は手を握ったまま死んでいたのだ。

この状態で殺されたのかもしれない。

学院を破壊した反乱軍は次の怒りと憎しみの矛先を向け、進軍するのだった。

逃げるルイズとシエスタ、そしてギーシュとの悲しい別れ（後書き）

次はカトレアを逃がす話に入ります。

ヴァリエール家に迫り来る反乱軍に家族はせめてカトレアだけでも無事に逃がそうとすると、一人の使用人の少年が志願し、カトレアを連れて逃亡します。

その少年は誰なのか？二人の逃亡先は何処に？

ヴァリエール家の次女の逃亡（前書き）

やっと仕事が一段落したので執筆しました。

ヴァリエール家の次女の逃亡

ヴァリエール城は反乱軍に包囲されていた。

城壁の周りにある深い堀が反乱軍の兵達に土などで徐々に埋められ、完全に堀が埋められるのも時間の問題である。

跳ね橋は反乱軍が城に入れないように吊り上げられた状態だが、いずれ堀を埋めた反乱軍が城を破壊しようとするれば何時まで持つのだろうか…。

籠城しているヴァリエール夫妻とルイズの姉であるエレオノールは当主の間で絶望的な表情で俯き、一言も言葉を口にしない。

城に仕えていた使用人の大半は彼らを見限る形で城を去り、反乱軍に加わった者も居た。

それはヴァリエール一家を快く思っていない者が殆どで、恨みを持つ者も少なくない。

外からドサドサと堀に物を落とす音が聞こえている。

「もうおしまいだな……」

「……………」

ヴァリエール公爵が諦めたように眩き、妻と長女は無言を貫いている。

魔法が使えなくなり、成す術がないので、ただ絶望するしかないのだろうか？

そんな時に当主の間の扉が開き、初老の執事と彼に支えられてヨロヨロと覚束ない足取りで歩いているピンクブロンドの女性が現れた。

「カ、カトレア！」

「カトレア！」

夫と、そして妻と長女はやって来たカトレアに驚く。

カトレアが家族の前に現れた頃にとつとつ堀が完全に埋まり、反乱軍が一斉に城を攻め始めた。

堀が埋まってしまった事を知ったヴァリエール公爵は目を閉じ、家族に話し掛ける。

「堀が埋まってしまったか。

ヴァリエール家はもう終わりだ……だが、ワシは何もせずに死ぬつもりはない。

貴族として、最期まで戦って誇り高く死のう」

「あなた……それでこそ我が夫ですわ！ええ、私もあなたと共に戦いますわ！魔法が使えなくなっても最期まで『烈風』として！」

「お父様、お母様、私も戦います！」

追い詰められた三人は覚悟を決め、反乱軍と戦う決意を固めると、カトレアが口を開く。

「お父様、お母様、エレオノール姉様。

私が外の方々に許してもらえるようにお願いしてみます。だから……」

「「「！！！」」」

「カトレアお嬢様！」

家族と執事がカトレアの話に驚いた。

カトレアが反乱軍を説得するとても言うのだろうか？

「お前は何を言っているのだ！？」

「そうよ、奴等が貴女の話の聞くと思っっているの！？」

「間違いなく殺されるわよ！」

叫ぶように反対する家族にカトレアは微笑む。

「私の命で家族が救えるのなら、私は喜んで死にますわ」

「カトレア（お嬢様）！！」

四人は悲痛な叫びを上げた。

彼らがカトレアを説得している時に跳ね橋が破壊されようとしており、このままだと、一時間もしない内に破壊されるかもしれない。

跳ね橋が破壊されれば、頑丈な門もすぐに破壊され、反乱軍が城内に攻めこむのは間違いないだろう。

もう時間がないのだ。

その頃、カトレアを止めようと必死になっている家族に執事が話しかけた。

「旦那様、奥様、お嬢様、実は一つ方法が御座います」

「ジェローム、その方法とやらは何なのだ？」

執事のジェロームにヴァリエール公爵が尋ねる。

ジェロームが言うには、この城の地下に秘密の水路があり、かなり距離があるが、そこを進むとヴァリエール家から遙か遠くの森に出られるらしい。

だが、その水路は底がかなり深く、水の流れが速いらしく、まともに行くとは危険であると説明したが、幸いにもその近くに小舟があるそうだが、その小舟には二人分しか乗せられないそうだ。

「……」

重苦しい雰囲気漂うが迷っている時間がないので、ヴァリエール公爵は意を決した。

「カトレア」

「はい、お父様」

「お前はその小舟でこの城から逃げなさい」

「！」

カトレアは父の言葉に驚いていると、カリーヌが部屋を出て、暫くすると戻ってきて、少し大きめのバッグを渡した。

「これを持って行きなさい。」

これにはお金と薬を入れてあるわ」

カトレアはバッグの中身を見てみると、中には数十枚以上の金貨とカトレアがよく飲んでいる薬がたくさん入っていた。

「お父様……お母様……」

カトレアは目に涙を浮かべていた。

「カトレア……私達の方まで生きてちょうだい！
恐らく、おちびは……ルイズはもう生きていないかもしれないけれど、せめて……せめて貴女だけは生きて！お願い！」

「姉様……」

カトレアはエレオノールに抱き締められた。

せめて死ぬ前に愛する妹の温もりを感じていたいのだ。

もう会う事がない最愛の妹の温もりを……。

「ジェローム、カトレアを連れて此処から脱出するのだ」

ヴァリエール公爵がそう命じるが、ジェロームは首を横に振った。

「いえ、私も此方に残り、あなた方と運命を共にします」

「何を言っておる！？病弱なカトレアを一人で逃がすと言うのか？」

生来、重病のカトレア一人で脱出など至難の業であるがジェロームは当主を安心させる言葉を口にする。

「」安心下さい、志願者がおりますので。

「ジュリアン、入りなさい」

ジェロームがパンパンと両手を軽く叩くと、一人の黒髪の少年が入ってきた。

「あ、あの初めまして！ボクはジュリアンと言います！」

緊張しているのか、ガチガチになって自己紹介したが、ヴァリエール公爵はジュリアンに接近し、ジッと彼の目を見ると、ジュリアンの両肩に手を置いた。

「ジュリアンとやら、カトレアを連れ、遠くに逃げよ」

「は、はい!」

ヴァリエール公爵はジュリアンの瞳に邪な心がない事を確認し、カトレアを託したのだ。

「時間がない!早く行け!」

「お父様……」

「お前だけでも生きてくれ……私達の間まで……」

「……………」

父の願いに言葉が出ない。

「カトレア、もう行きなさい……行くのよ!」

「幸せになってね、カトレア……」

「……………」

母と姉に対しても言葉が出ない。

家族は涙を流していた。

悲しい別れの涙を流しているのだ。

「カトレア様、行きましょう！」

ジュリアンがカトレアの手を掴み、部屋を出ようとする、カトレアは愛する家族に涙を流し、笑顔で別れの言葉を口にする。

「お父様……お母様……エレオノール姉様……また……お会いしましょう……」

ニツコリと笑い、涙声で別れを告げた。

「カトレアお嬢様！お元気で……ジュリアン、お嬢様を頼んだぞ！」

「はい、ジェロームさん、今までお世話になりました！……さようなら……」

二人は当主の間を後にした。

ジェロームに教えてもらった地下水路に到着した二人は壁にあった小舟に乗り、激しい水の流れによって早く小舟が進み、無事に城を脱出出来た。

森に着いた頃にはヴァリエール城は反乱軍によって炎上していたの

だ
っ
た。

ヴァリエール家の次女の逃亡（後書き）

今回はジュリアンに救われたカトレアがルイズと再会します。

姉妹はお互いの無事を喜び、同時に家族の死を嘆きます。

次は『神の代行者の戦いと5000年前の歴史』を更新します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4649u/>

晩年のルイズとその家族

2011年12月19日02時53分発行